

## 11-C 抑圧と抵抗、自由な精神

アイスキュロスは権力者に抵抗する自由な精神の持ち主を主題にする悲劇を書いた。権力者の専横に抵抗する高貴な魂の持ち主を描いた劇の中から以下の作品を取り上げる。

### 1. 『縛られたプロメテウス』におけるプロメテウスとゼウス

これは悲劇『縛られたプロメテウス』を扱い、人類に火を与えた罪を問われ岩山に磔の刑に処せられたプロメテウスが、新しい神々の主権者ゼウスに果敢に挑む抵抗を論ずる。

### 2. 『救いを求める女たち』におけるダナオスの娘たちとアイギュプトスの息子たち

この作品は従兄たちとの意に反する結婚を迫られた娘たちが故国エジプトを後に自由を求めてギリシアに逃亡し、アルゴス王ペラスゴスの保護を求める物語である。敢然と自己主張をする娘たちとその自由意志を尊重する王の民主的精神を論ずる。

### 3. 『アガ멤ノーン』におけるカッサンドラーとクリュタイメーストラ

これは『オレスティア三部作』の長大な第一編『アガ멤ノーン』の中の主要な登場人物の一人であるトロイアの王女カッサンドラーに的を絞り、トロイア戦争の捕虜として異国に連行されアガ멤ノーンと共に殺される高貴な女性の悲運を扱う。その論拠として古代の作品に添付された「前書き」（作品解題 hypothesis）を用いその解釈を考察する。

これらの主人公に共通するのは圧倒的な権力の前に屈服することなく、自由で高貴な魂を持ち続け抵抗する姿勢である。

まえがき — プロメーテウスの「故意の過ち」について —

ゼウスは父ウーラノスを倒して権力を奪ったクロノスの子として生まれ、自分も同様にクロノスを倒して権力を手に入れた。そのゼウス自身もまた、ある女神との間に生まれる自分の子によって権力を奪われる運命にあるが、それを避けるためにはその女神に近づかなければよい。そして彼の婚姻の秘密を知るのは神々の中でもただ一人、運命を予知する神プロメーテウス（先を知る者）のみである。だがプロメーテウスは、ゼウスによって屈服させられたクロノスの一族、ティーターン族の一員であった。

プロメーテウスは人類の創造者であるが、それらの惨めな生活ぶりを哀れんで天上の火を盗み彼らに与えた。そしてその罪を問われていまコーカサスの岩山に磔の刑に処せられようとしている。神話ではゼウスの遣わす荒鷲が昼間に彼の生き肝を啖い、その疵は夜の間に癒えてまた次の日に同じ苦しみに遭うことになっている。彼がその無限の刑罰を逃れるためには、その婚姻の秘密を明かせば良いのだが、彼はそれを拒んでいる。

劇の冒頭ではゼウスの権力と暴力を表すクラトスとビアーが彼をひっ立てて登場し、鍛冶の神ヘーパイストスが彼を岩山に釘付けにする。クラトスとビアーは彼の予知力の無さを罵り、同じ神族であるヘーパイストスは彼に同情するが、彼は無言のままである。

彼らが立ち去って一人残されたプロメーテウスの許に様々な訪問者がやって来る。それはティーターン族であるオーケアノスの娘たちのコロス、そしてオーケアノス自身、またイーオーとヘルメースであるが、ゼウスとプロメーテウスの間におけるそれぞれの位置に応じて、プロメーテウスに同情して忠告したりあるいは非難したりする。彼らが一様に指摘するのは、悲運の原因となった未来を知る神らしくない彼の「判断の誤り」であり、その頑なな態度である。彼らはその頑迷な態度を改めてゼウスと和解をするように忠告するが、プロメーテウスは自分が「故意に判断の誤り」を選択したのだと宣言しゼウスとの和解を拒否する。そして彼を説得しようとするものの、圧制者に対する孤高の抵抗を続ける彼に共感するオーケアノスの娘たちは、ゼウスの放つ雷霆に撃たれて彼と運命を共にする。

全編を貫くのはいかなるゼウス側の脅しにも屈せず、自由な魂を守るプロメーテウスの態度であり、剛毅な姿勢である。

『縛られたプロメテウス』はアイスキュロスの三部作の第一部をなし<sup>(1)</sup>、人類の創造主であるプロメテウスが、神々の専有する火を人類のために盗み取って与えたために、ゼウスによってコーカサスの岩山に磔にされ、更にゼウスの地位を脅かすその婚姻の秘密を明かすように迫られてもそれを拒み、奈落の底に落されるという筋立てを取っている。

この劇は一般に難解なアイスキュロスの作品の中では比較的判り易く、専制的なゼウスの支配に対抗して人類に恩恵を施し、そのためにゼウスの怒りを買って罰を受ける受難者としてプロメテウスが描かれていると考えられ、今までに様々にその思想や内容が論ぜられて来たが、そのプロメテウス像は読む人それぞれの立場から多様に理解されている。

ところでこのプロメテウス理解の基本になるのは、プロメテウスが火を盗んだ「罪」のために磔という「罰」を受けたという点に関する解釈の仕方である。そしてこの火を盗むという行為が果して「罪」とされているのかどうかという点が、プロメテウスの受ける「罰」が正当なものか否かという判断に影響を及ぼす。それは権力者に刃向かって天界の秩序を乱す反抗者が罰されているのか、或いは「罪なき者」が「故なき罰」を受けるといふ「義なる受難者」の苦しみが描かれているのかという劇解釈にまで及んで来る。

ところがプロメテウスが「人類のために火を盗んだ」という行為そのものには変りはないので、この行為を「罪」と見るかどうかは、劇の登場人物がそれぞれ置かれた立場によって異り、またこの劇そのものの評価も観る人の立場によって異なって来る。そこでまずこの論文では「罪」ということばの意味と、プロメテウスの行為とこのことばとの関連を劇の中で追いながらプロメテウス劇の本質を探っていこうと思う。

さてこの『縛られたプロメテウス』の背景をなす物語は、アポロドーロスによれば次の通りである。

「プロメテウスは水と土から人間を象り、ゼウスに秘して巨回香の茎の中に火を隠して彼等に与えた。ゼウスがそれを知った時に、ヘーパイストスに彼の身体をスキュティアにあるカウカサスの山に釘づけにするように命じた。この山にプロメテウスは幾年もの間釘付けにされたまま過ごし、鷲が毎日空から彼の所に舞い下りて肝葉を啖ったが、それは夜の間にまた再生したのであった。かくして我々がヘーラクレスの物語で明らかにするように、ヘーラクレスが彼を解き放つまでプロメテウスは火を盗んだ罪をこのようにして贖ったのである」<sup>(2)</sup>。

ここに「火を盗んだ罪を贖った」とあるのは原語では *diken etine* であって正確には「罰を受けた」という意味であり、このアポロドーロスの伝える神話の概要の中では「罪」と

いうことばは特に使われてはいない。またヘーシオドスの「仕事と日々」の中では巨茴香の莖の中に火を隠して盗み出したプロメーテウスの仕業に気づいたゼウスは彼に向かって次のように言う。

「イーアペトスの子よ、お前は誰よりも企みに長じており、火を盗み私の考えの裏をかいて喜んでいるが、お前自身と将来の人間どもにとってもそれは大きな災だ。」そしてゼウスは盗まれた火の代わりに人間にパンドーラという悪（禍）を贈った<sup>(3)</sup>。ここで「災い」と訳したのは *pema* であって「罪」ではなく、ヘーシオドスのプロメーテウスに関する幾つかの記述の中にも「罪」ということばは使われていない。

ところでヘーシオドスの『神統記』の中には「罪」に関して次のような文がある。「夜 *Nyx* は運命 *Moirai* と容赦なく罰する死の運命 *Ker* とを生んだ。この運命の女神たちクロートー、ラケシス、アトロポスは人間が生まれる時に善きものと悪きものを持つように与え、人間と神々との犯罪 *parabasis* を追求する。そしてこれらの女神たちは、違犯を犯した者に *hos tis hamartei* 悪しき報い(罰) *opis* を与えるまではその恐るべき怒を決して止めない」<sup>(4)</sup>。つまり人間であれ神々であれ、違犯(犯罪) *parabasis* を犯す *hamartanein* 者は罰 *opis* をモイラたちから受けるというのである。

『神統記』にはまた次の文が見られる。「イーアペトスはオーケアノスの娘の麗しき蹀持てるクリュメネーをめぐり、彼女は心剛きアトラス、誉も高さメノイティオス、様々な巧智に長けたプロメーテウス、そして心惑えるエピメーテウスとを生んだ。彼は始めから利得を求める人間にとって禍となった」<sup>(5)</sup>。

この物語の中では将来を予見することができるプロメーテウスと、事件が起きてしまった後でなければ悟らないエピメーテウスとが、パンドーラの贈り物に関して比較されているのである。またここに「心惑える」と訳したのは *hamartinoos* ということばであり、精神(判断力)が誤っている *hamartanein* つまり「頭が鈍い」という意味に使われている<sup>(6)</sup>。

上のヘーシオドスの文章にあるように、本来将来を見通し自分の運命を予見できたはずのプロメーテウスが、どういう判断の誤りからか「過ち」 *hamartia* を犯してしまった。彼はまるで判断力の無い *hamartinoos* 弟のエピメーテウスと同じような愚かな行為をして、その為に神々の王ゼウスから罰を受けるはめに陥ったのである。この一見皮肉な物語に終りかねない素材を、アイスキュロスがどのようにして崇高な悲劇に作り上げたかを考えてみたいが、その謎を解く鍵は劇の素材となる神話伝説には明確に表現されていない「罪」について、アイスキュロスがどう解釈していたかを追求するところにあると思う。

ところで上に引用した文章の中で用いられている「罪」に近い意味を持つことばの *parabasis*（違犯）あるいはその動詞形は、アイスキュロスの「プロメーテウス」の中では使われていない。その代り *hamartia*（非、過ち）、或いはその動詞形がプロメーテウスの行為に関連して多く使われている。それ故このことばを主に追っていくことがこの劇の解釈の手がかりとなるだろう。

さてこの *hamartia* ということばは *hamartanein* という動詞から派生しており、元来は投槍を目標に当て損うことを意味し、それから「失敗する、誤つ、間違いを犯す」という意味に転ずるのである。*hamartia* が、"guilt, sin"、という意味を帯びるのは前四世紀以降の哲学的・宗教的著作においてであって、アイスキュロスがこの意味で *hamartia* を用いていないことは既に指摘されている<sup>(7)</sup>。

これはもし「過ち」が完全な正義を体現する唯一の至高神に対して人間の側からなされるのであれば、その行為は同時に倫理的な「罪」ともなり得るのであるが、プロメーテウス側においてはゼウスも神々の中の主権者にすぎず、それも最近権力を握ったばかりの専制君主として描かれており、<sup>(8)</sup> プロメーテウスはその暴虐な支配に反逆するティーターン族の一人なのであるから、その行為が倫理的な意味合いを持った「罪」とされていないのは当然である。

また上にも述べたようにプロメーテウスの行為を「過失、過ち、咎」と見る者にとってそれがどういう意味合いを帯びるかということは、ゼウス対プロメーテウスという対立関係においてその視点をどこにおくかということに関わって来る。この点で「縛られたプロメーテウス」はクラトスとビアー、ヘーパイストス、オーケアノスの娘からなるコロス、オーケアノス、イーオーそしてヘルメースという登場人物を次々に舞台に送り込んで、それぞれの人物の口を借りてプロメーテウスの「過ち」とその結果としての「罰・苦難」の本質を浮き彫りにしていくという構成を取っている。プロメーテウスが岩山に縛りつけられた不動の姿をとったままで、それぞれの人物の非難に或いは黙して耐え、或いは答えて自分の考えを述べるという手法は、この観点からは決して生硬な演出ではない。それは他者には理解され得ない、彼の内面の苦衷と悲哀を表すためには非常に効果的な手法である。

これらの登場人物の中でヘルメースはゼウスの子として、クラトスとビアーはそれぞれゼウスの権力と暴力の擬人化として、ゼウスの側の観点を明確に代表する。オーケアノスはプロメーテウスと同じティーターン族でありながら、ゼウスの権力に屈服してプロメーテウスを説得しようとする立場に立ち、その娘のコロスは彼を説得しようとはするものの、

彼に対する同情とゼウスの支配に対する反抗からプロメーテウスと運命を共にする。唯一の人間としての登場人物イーオーはゼウスの暴力的な欲情の犠牲者として、またプロメーテウス以上に「故なき苦難」を受ける者として描かれている。これらの登場人物がプロメーテウスの行為をどう判断しているかを以下に劇の流れの中で追っていこう。

### プロローグ

ゼウスの権力の象徴である擬人化された権力クラトスと暴力ビアーとが、プロメーテウスを引き立て、ヘーパイストスを伴って登場する。前半はクラトスとヘーパイストスとの間だけで会話が行われ、この間ビアーもプロメーテウスも無言である。

クラトスは冒頭でプロメーテウスが岩山に磔にされる理由を述べる。それはプロメーテウスが全ての技 *pantechne* の輝きである火を盗み取って人間たちに与えたからである。その咎 *hamartia* の償い *diken dounai* を彼はしなくてはならない。それは彼がゼウスの主権 *tyrannis* を耐えしのび、人間を愛する *philanthropos* 性質を止めるためである(7-11)。

ここに明らかにされていることはアポドーロスの神話で要約されていることと大差はない。しかしアイスキュロスは既に観客が熟知している神話の大筋を冒頭に置いて、それに彼自身の劇のテーマを簡潔に明確につけ加えている。それはプロメーテウスが *hamartia* の償いとして磔にされるということである。ヘーパイストスはクラトスの指図を受けながらプロメーテウスを岩山に打ちつける作業をするが、親族関係にある神に手荒な真似をすることは気が進まない *atolmos*、しかし父神の命令を遂行するために勇氣 *tolma* を揮ってそれにとりかかる。

彼はプロメーテウスにテミスの息子よと呼びかけて、自分の余儀ない立場の弁命をする。彼がこの非情な岩に「それを望んでいないプロメーテウスを」打ちつけるのは「自分から進んでするのではない」*akonta s'akon* と彼は言訳をする。こういう報いを受けるのは彼の人間を愛する性質の故であり、神の身でありながら神々の怒りを憚らず人間たちに正当以上の *para diken* 贈物を与えたからである。この為に岩山に縛りつけられる破目になったが、ゼウスの心はなだめ難い。新たに権力を握った者は誰でも皆峻厳なものだから。(18-35)

ためらうヘーパイストスをここでクラトスがせき立てるが、このやり取りの間にクラトス、即ちゼウスの権力の性質とゼウス以外の神々の置かれた位置が明らかにされる。クラトスは無慈悲 *neles* で傲慢 *thrasos* に満ちており頑固 *authadia* で感情が激しい。この頑固さ *authadia* は頑丈な *authades* くさびの先を、プロメーテウスの胸に打ち込むよう命令す

るところにも示されている。この残酷な所業は、どんな智者といえどもゼウスより愚かであることを学ぶためであり、ゼウスを除いては自由な者は誰もいないからである(50)。岩に磔になったプロメーテウスに対して、クラトスは神々の特権を盗み人間に与えたことを責め、この自分の運命を予知できなかった彼はその名に値せぬとあざ笑う。(36-87)

クラトス、ピアー、ヘーパイストスらが退場した後に、プロメーテウスはやっと口を開き自分の苦難を嘆く<sup>(9)</sup>。まず彼は天空、風、川、泉、海の波、大地、太陽に呼びかけて、自分が神々からどのような仕打ちを受けているか見るように訴える<sup>(10)</sup>。新しい神々の支配者 *Iagos* は彼に侮辱 *aikēia* を加え、恥ずべき *aeikes* 縛めを考案してその苦しみには終りが無いように思える。しかし自分には未来が全て前から分かっている、予期せぬことは何もない。定められた運命はできるだけ平静に耐え忍ばねばならない、必然の力には抗い難いから。

しかし自分は今この運命に黙していることも黙さぬこともできない。人間に全ての技術を教える火の源を盗み取って与えたために、こうして縛められているのだから。このような咎 *amplakema*<sup>(11)</sup> の罰 *poine* を大空の下に釘づけにされて受けているのだ。(105-112) この苦しみも全て人間に対する過度の愛 *lian philotes* の故である。(122)

このようにプロメーテウスが苦しみを訴えているところに、オーケアノスの娘たちからなるコロスがやって来る。岩山に縛られた彼のもとに次々と訪れる訪問者は、それぞれ異なった仕方でゼウスの専制的権力の性質を体現しており、或る者は善意から、他の者は悪意からプロメーテウスの行為を批判するのである<sup>(12)</sup>。そしてこの批判の中から彼の行為の本質が浮び上って来る。

#### パロドス

オーケアノスの娘たちのコロスは、また新たな苦しみが襲って来たのではないかと恐れるプロメーテウスを安心させて、自分たちがやって来た理由を説明する。プロメーテウスも親しい身内の娘たちには心を開いて語り、その言葉の中に彼が自分の行為をどう考えているかということが率直に披瀝される。

コロスは無残なプロメーテウスの姿を見て悲しみ、オリュンポスの舵を新しく取る支配者ゼウスの新しい法による支配が、無法状態 *athetos* と異ならぬことを述べる。プロメーテウスの今の姿を見て喜ぶ神は他に居ないが、ゼウスのみはウーラノスの一族を屈服させるか、或いは他の謀みによってその支配権を奪われるまでは、その怒りを和らげることは

ないだろうという(127-168)。

プロメテウスはそれに答えて、ゼウスが彼の支配権も名誉も奪われる新らしい謀りごとを示すように求めて彼を必要とする時がいつかは来るだろうが、彼が受けた辱め *aikēia* の償いをするまではいかなる説得 *peitho* の誘いにも応ずるつもりは無いと言って、彼がゼウスの秘密を握っていることを仄めかす。

コロスはプロメテウスが、このひどい苦悩の中でも大胆でありひるむ様子もなく、あまりにも自由な口を利く *eleuthero-stomein* ことに驚き(180)、彼の身の上を案ずる。しかしプロメテウスは、今のうちはゼウスが荒々しく正義を意のままにしているが、いつかは打ちひしがれて心が穏やかになるだろうという(168-192)。

ここでプロメテウスが指摘しているのは、ゼウスが正邪の基準を自分に置き、それに抗う者が邪とされることの不合理である。この基準からすればゼウスの意に添わない行為は「過ち」とされるに止まらず「罪」とされることになり、こういう論理は絶対専制君主の権威を認めない彼には受け入れ難いことである。こういう彼の態度がコロスには大胆で、自由すぎる口を利くものと映るのである。

そしてプロメテウスはコロスの間に答えて、ゼウスがクロノスと王位を争った時には彼の自発的な *hekonth' hekonti Zeni* (218)援けと計略によって勝利を得たのに、ゼウスはこういう酷い罰を報いて返してよこした。それは専制君主は、味方を信用できないという病いを持っているからだと彼は説明する(199-225)。

またゼウスがプロメテウスをこのように苦しめる理由 *aitia* をも説明する。ゼウスが王座につくや否や神々には褒美を与えたが、哀れな人間には構わずに新たな種族を創る為にそれをすっかり滅ぼそうと考えた。それに対して誰も抵抗しなかったが、自分だけがそれを敢えてした *tolman* (235)。このように人間を憐れんだ自分が、自らは憐みを受けるのにも値せぬものとしてこうして容赦ない仕置にあって(226-241)。

彼は更に続けて、人間が運命 *moros* を予見できないようにした代りに、盲目的な希望を彼は与えたという。また彼は人間に多くの技術を学ぶことができる火というものを与えたが、そのような咎 *aitiama* でゼウスからこの責苦を受けている(247-258)。

それに対してコロスは次のように言う。「どうして良いと思うのでしょうか？どんな望みがあるというのです？あなたが誤ちを犯した *hoti hemartes* ということがお分りになりませんか？あなたがどうして誤ちを犯したか *hos d' hemartes* などと言うことは、私にとって快いことでもないし、あなたにとっても辛いことです。でもそんなことは止めておいて、



この困難から逃れる方法をお探さない。」(259-262)

これに答えてプロメテウスは次のように言う。「苦しみ pema の外に身を置いている者が、苦しんでいる者に忠告したり、注意したりするのは容易なことだ。だが私にはこのことは全て判っていたのだ。私は自ら進んで過ちを犯したのだ hekon hekon hemarton、それを否定するつもりはない。人間どもを助けたために自から苦難に陥ったのだ。(263-267)

これは非常に興味深いことばである。hamartanein ということばが「的に正しく射当てられず、逸れて失敗し、誤り、間違いを犯す」という意味を持っているなら、それは本来自分の意志とは無関係なはずである。プロメテウスの敵たちが彼の責任を問うて「過失、過ち」に止まらず「故意の犯罪」だと言っているのならともかく、ここでは彼の苦難に同情しながらその大胆さを諷めているコロスは、彼が自分の「判断の誤り、思い違い、失敗」にどうして気がつかないのかと問い質しているのもあって、彼の責任を追求しているのではない。

ところがプロメテウスは折角のコロスの思いやりも否定して hekon hekon と繰り返し強調して「自分の意志で、自ら進んで、故意に」その行為をしたのだと断言しているのである。もしそこに自分の意志が強く働いているのであれば、それは「思い違い、失敗、判断の誤り」ではなく、「過ち、咎」であり、更に進んで「罪」といえるものである。それではプロメテウスはここで「罪」の自覚、或いは告白をしているのであろうか。しかしここでは、この問題について注意を喚起するに止め、これについては後でもう一度論ずることにして先に進みたい。

ここでプロメテウスは、コロスに現在の苦痛を彼のために嘆くのではなく、将来の運命を聞くために地上に降りて一部始終を知ってくれるように頼む、苦しみというものは人から人へと巡って伴うものであるから。コロスはこの呼びかけに応じて、彼女たちも「自ら進んで」 ouk akousai 耳を傾け、この険しい大地に降り立って彼の苦難を全て聞こうという。

ここにプロメテウスと同じティーターン族であるオーケアノスがやって来る。彼はゼウスに征服された神々の一人であり、プロメテウスを血縁のよしみで説得してゼウスにとりなしてやろうと考えている。オーケアノスは彼の苦難に同情はするものの、彼の苦難は彼の性格に由来するものと考えているのでその説得はむしろ非難がましいものになり、その言葉の中に彼の行為に対する批判が強く出て来る。

「私は見ている、プロメテウスよ、そしてあなたは知恵者には違いないが、私はあな

たに最善のことを忠告したいのだ、「汝自身を知る」のだ、そして新しいやり方に調子を合わせるのだ、神々の君主も新らしいのだから」(306-310)。彼はここでデルポイの格言を引用して<sup>(13)</sup>、人間にその分を知れと勧めるように、知恵に富む神プロメテウスに対してゼウスに屈すべきことを説く。

またオーケアノスの忠告は、プロメテウスの無謀を指摘する時に一層その非難の調子を高める。「だがプロメテウスよ、このようなことは余りにも高慢な *hypsegoros* 舌の報酬なのだ、あなたはまだ謙遜 *tapeinos* ではなく不幸に屈しないで、現在の不幸に加えて更に新たな不幸をつけ加えようと望んでいる。だから私を手本として尖ったものを蹴りつけることはしないように<sup>(14)</sup>、仮借なき独裁者が思いのままに支配していることを悟るのだ」<sup>(15)</sup> (318-324)。

ここでは彼はプロメテウスが高慢な性格で不遜なために、現在の苦しみを受けているのであり、それはむしろ当然な報いだと言うのである。この考えは後にも繰り返されて「わきまえない舌には罰が加えられる」(325)と彼は言う。またこの「尖ったものを蹴る」という表現は『アガメムノーン』(1624)で、アガメムノーン暗殺を非難する長老たちにアイギストスが答えて権力者に服従せよと命ずる言葉の中に使われている。つまりオーケアノスは専制君主には屈服することがわきまえのあることであって、自由を求めて抵抗することは愚かで傲慢不遜なことだと言っているのである。これでは結局プロメテウスを慰めに来ているつもりでも、自分の意気地のない行為を弁解しつつ相手を非難しているわけで、プロメテウスを説得できるはずもない。

プロメテウスはそれに対して、オーケアノスが自分と一緒に全てに加わり、<sup>(16)</sup> 大胆な行為をして *tolman* おきながら咎めを受けずにいることは羨ましいことだと皮肉を言い、自分に構わずに放っておいてくれと頼む。こんなことの為にさらに多くの者が苦しみを受けることは望まない、プロメテウスを見本にするまでもなく自分の判断で自分を救うように勧める。プロメテウス自身はゼウスのわきまえがその怒を鎮める時まで、現在の運命に耐え抜くつもりだという。(330-376)

そして次のような会話が続く。

オ「プロメテウスよ、ことばは病める感情（怒り）の医師だということを君は知らないのか」？

プ「もし人がほどよい時に心をなだめて、猛り立つ心を無理に抑えないなら」。

オ「では熱心さと大胆さの中にどのような損になることがあると君は見るのか？ 教え

てくれ」。

プ「並外れた苦勞と、おめでたい単純さだ」。

オ「私がこの病いを病むにまかせておいてくれ、正しい考えを持っていても賢いと思えないことが一番得になることだから」。

プ「この過ち *amplakema* は私のものだと思われることだろうよ」。

(377-385)

この劇では「病い」ということばが常規を逸した行動の表現として多く用いられているが<sup>(17)</sup>、ここでオーケアノスは自分の好意ある申出が受け入れられないことに焦立ってこのことばを用いている。そして彼が自分の行動が愚かに見えても本当はわきまえがある *eu phronein* のだと言うと、そのことばを受けてプロメテウスは本当に賢いのにそう見えないという過ち（落度）*amplakema* は、オーケアノスの立場ではなく自分の立場であると主張しているのである。ここに *hamartia* に関するプロメテウスの自信が示されている。つまり自分は誤っているようには見えても本当はそうでないという確信の上に立って、そう思いたい者にはそう思わせておけという自負の気持が表われているのである<sup>(18)</sup>。

コロスは第一スタシモンでプロメテウスの苦難を嘆き、ゼウスが自分で勝手に定めた法によって古い神々を支配し、傲慢な *hyperphanos* 気性を示していると唄う。プロメテウスの苦難に同情して嘆く者は全世界にあまねく及び、海も冥界も河も悲嘆の声を挙げると(397-435)。

プロメテウスはやおら口を開いて、自分が黙っていることを傲慢 *chlide* や頑固さ *authadia* の故だと思わないでくれと頼む。彼は自分がこのように辱かしめられていることに心を痛めてはいるが、この新しい神々に特権を与えたのは彼自身であった。そして以前には惨めな存在であった人間に彼が与えた様々な恩恵を述べ立てる。彼は人間に季節や時を知る方法を教え、数や文字を与えた。また家畜や船を与え、病気の治療法、占い、吉凶の判じ方を教え、地中の金属を与えたのも彼である。即ち人間の持つ全ての技術 *techne* はプロメテウスから出たものであるという(436-506)。

コロスはプロメテウスが人間を度を過ぎて *kairou pera* 助けておきながら、自分の不幸については構わないという態度でいるが、そういうことはせぬようにと説く。そして彼がこの縛めから解放されてゼウスに劣らぬ力を得ることを望むとコロスがいうと、彼はこう答える。

「物事を成就したもう運命 *moira* は、これをそんな風に成し遂げるとは定めていない。

無限の苦痛や苦難によって屈服させられてやっと私は縛めを逃れるのだ。彼術 *techne* は必然 *ananke* よりはるかに非力なのだ」(511-514)。

彼はこう言って、必然を支配するものはモイラとエリニユスであり、ゼウスすらその支配を免れ得ないという。そして彼はそのゼウスを待ちうける運命を知っているのだが、今はそれを教えることはできない、その秘密を握ることによって、彼はこの苦難から逃れることができるのであるから(515-525)。

このようにゼウスといえども全能ではなく運命の支配下にあり、その秘密を知っているプロメテウスは自分の自由を約束する鍵を手にはしているわけであるが、彼自身もまずその前に無限の苦悩によって屈服させられることが語られている。これはプロメテウス自身は否定しているがその頑固さ *authadia* が苦痛によってたわめられ、ゼウスとの和解に至るといふ結末を暗示しているものと解釈できるだろう。

コロスは第二スタシモンで唄う。

「全てを知ろしめすゼウスが私の考えに対して反対する力を置くことがないように、また決して私が、父オーケアノスの尽きぬ流れのほとりで牛を屠って献げる聖なる食事を、神々に奉るのを怠ることがないように、また私がことばによって過ちを犯すこと *alitainein* がないように、このことが私の心に留って決して忘れられることがないように」(526-535)。

オーケアノスの娘のように地位の低い群小の神々は、人間と同様に天上の神々に対して犠牲を献げて恭順の意を表わすのであるが<sup>(19)</sup>、コロスはここでは自分たちの考えとゼウスの考えとが対立してことばの上での過ちを犯すこと *alitainein* も無いようにと祈るのである。ところがプロメテウスはゼウスを恐れ憚らずに独自の考えで *idiai gnomai* 人間を大事にしたために苦難を受けたとコロスは言っている(545)。

第三エペイソディオンでは、イーオーが牛の角をつけた姿で登場する。彼女はゼウスの暴力的な欲情の犠牲となり、ヘーラーから送られた虻に苦しめられ錯乱した状態で現われる。彼女は真に罪なき者の苦難を示し、プロメテウスはゼウスの権威に逆って人間を愛したがために咎ありとされた者の苦難を示す。それ故イーオーは彼に次のようなことばをかける。

「ここはどんな国、どんな人が住んでいるのでしょうか？あそこに見える岩の軛につながれて雨風に曝されている人を誰とえば良いのかしら？あなたは何の咎 *amplakema* で死の罰 *poine* を受けておいでなのですか？この惨めな私が大地の何処にさまよって来たの

か教えて下さい」(561-565)。

この何の過ち、咎で *amplakia* という問は(620)でも繰り返されている。そしてイーオーは蛇に追い回されて各地を放浪する苦しみを述べた後に言う。

「あ、あ、辛いこと、この遠くさまようさすらいはどこへ私を連れていくことやら？ いったいどんな、おおクロノスの御子よ、いったいどんな過ち *hamartousan* を見つけ出して、私をこのような苦しみに縛りつけたのですか？あ、蛇に追われる恐怖によって、あなたはこの惨めな娘をこんなにも、気の狂うほどに疲れ果てさせます。」(576-561)

彼ら二人に共通するものはともに何らかの咎、落度が原因となって受ける苦難であるが、イーオーはそれを否認し、プロメテウスはそれを自分に認めている。

プロメテウスはそれに答えて、イーオーの苦難の真相を明らかにする。

「どうして私に、蛇に追い回されているイーナコスの娘の声が聞えないことがあるか？ その娘はゼウスの心を愛欲で燃え立たせ、今また果てしなき旅路をヘーラーに憎まれて無理強いに *pros bian* 追い立てられているのだ」(589-592)。

そして自分自身の身分を明かすと共に、その苦難を受けた理由をも同時に示す。「お前が見ているのは、人間に火を与えた者、プロメテウスだ」(612)。

次にイーオーはコロスの望みに応じてその苦難の次第を物語る。それは彼女の処女の寝室に夜ごとに幻が現われて優しいことばで語りかけることから始まった。その幻はゼウスが彼女を得たいと望む欲望 *himeros* の矢に焦がれて、その眼のあこがれ *pothos* を満たすためにレルネーの牧場に来るようにと誘うものであったが、彼女がそれをためらっていると、父のイーナコスに神託が下ってイーオーを家から追い出せ、さもないと一族が滅ぼされると伝えた。

「このようなアポローンの神託に従って、イーナコスはその意志に反して、その意志が無いイーオーを *akousan akon* 家から追い出して閉め出しました。しかしこのこともゼウスの強制が *chalinis* 無理やりに *pros bian* 父にすることを余儀なくさせたのです *ep-anankazein*」(669-672)。 とこのようにイーオーは父と娘の意志を踏みにじったゼウスの暴力的な強制を語っている。これは後のイーオーの子孫のダナオスの娘の苦難の背景にある、娘たちの自由意志を踏みにじる男たちの暴力と共通した性格を持っている<sup>(20)</sup>。

プロメテウスはコロスの問いに答えて、今後のイーオーの辿るべき苦難の旅路について語った後で、罪なきイーオーにこれほどの苦難を与えるゼウスに対する彼の考えを述べる。「神々の僭主は全ての事について同じように暴力的 *biaios* だとお前たちには思えない

か？この神は人間である処女と交りたいと欲してこの放浪に追いやったのだ。おお娘よ、お前の婚姻の宴の求婚者として酷い男を得たものだ」(735-740)。

ゼウスはこのように自分の欲望のために、イーオーを苦しめる残酷な専制君主として描かれている。そして今後の自分の苦難の放浪の予言を聞いて嘆くイーオーに、プロメテウスは彼女がエジプトに至ってその苦しみから解放され、その子孫からプロメテウスをも解放する者が現れるという運命を語って彼女を励ます(741-876)。

再び虻に追い立てられて退場するイーオーを憐れみ、そのような運命をもたらす結婚が自分たちを待ち受けていないことを願うコロスに対して、プロメテウスはゼウスの地位も覆えされる時が来ることを予言する。

「まことに、どれほど心が頑固で *authades* であろうとも、ゼウスが謙遜 *tapeinos* になる時があるだろう。彼は自分を僭主の地位から卑少な存在へと追い落すような結婚を準備するのだ。その時こそ父クロノスの呪いが完全に成就されるだろう、古き玉座から追い落されながら呪った呪いが」(907-912)。

神々の間には比類なき権力を奮うゼウスが、罪なき娘たちに対して意のままに迫る暴力的な愛によって彼女たちを苦しみに陥し入れておきながら、今度は自分自身はその結婚から生まれる子供によって王位を奪われるという運命は皮肉な呪いであるが、プロメテウスがここに語ったことばは正にオーケアノスがプロメテウスに説き勧めたことばである。絶大な権力を誇る者もその地位は不動ではなく、頑迷を棄てて謙遜を学ぶ時が来るがそれは支配することと隷従することの違いを知った時である。ここにはアイスキュロスの「苦しみによって学ぶ」<sup>(21)</sup> という思想が表われている。

こういう大胆な予言をするプロメテウスに対してコロスは服従を説く。

コ「不可避の報復の女神アドラスティアに対しては平伏するのが賢い人なのです」。

プ「時の権力者をいつも崇め尊びへつらうが良い、しかし私にとってはゼウスなど何者でもないのだ。彼はこの東の間の時を好きなように支配していれば良い、神々を支配しているのももう長いことではないのだから」(936-940)。

ここでコロスが跪拝 *proskynesis* を勧めて、それをプロメテウスがきっぱりと断っていることは注目に値する。コロスはこの箇所では神々といえども従わざるを得ないアドラスティアについて述べているのであるが、実際にはゼウスに対する屈従を勧めているのであるから自由な精神を誇るプロメテウスがそれに譲歩するはずがない。人間は基本的には同等な存在であるというのがギリシア人の共通の意識であって、それ故に人間が神々に

対してとる礼拝形式 *proskynesis* を王に対しても行うペルシア人をギリシア人は軽蔑していた<sup>(22)</sup>。地位の差はあっても同じ神であるゼウスに対するこういう屈従を拒否するプロメテウスの心情にギリシア人は強い共感を覚えたことであろう。

ここにヘルメースがゼウスの意を受けて、その婚姻の秘密を語らせようとしてやって来る。彼は開口一番明らかにプロメテウスを非難し、その咎を責める。

「おいお前、そこの知恵者、この上ない気難し屋、神々に対して大層な過ちを犯し *exhmartonta*、はかなき生命の人間を大事にして火を盗み取った奴に言うことがある。」  
(944-946)

ヘルメースはこのように尊大な呼びかけをして、プロメテウスが知っているとは大胆にも大口をたたいている *kompein audan* その結婚の秘密を明かせと迫る(947)。この命令を拒絶するプロメテウスに対してヘルメースは彼の苦難は彼の頑迷 *authadisma* (964)の故だという。しかしプロメテウスはゼウスに仕える彼の身分を卑しみ、彼を従僕、隷従者と蔑んで、それに較べれば自分の現在の苦難の方がましだと言う。このプロメテウスの態度をヘルメースは傲慢 *chlidan* だとなじり、彼が病んで正気を失っているとしか考えられない(977)。

ヘルメースは遂にプロメテウスを屈服させることを諦めて次のようにいう。「沢山ことばを費しても無駄なことを言ったようだ、私の懇願によってもお前は心が解けず和らぎもしない。お前はまるで、轡をかけられたばかりの若馬のように馬銜を噛んで暴れ手綱に抗っている。なぜなら頑迷 *authadia* というものは、わきまへの足らぬ者にとってはそれ自身何の役にも立たないものだからだ」(1007-1013)。

またそのことばの終りに更につけ加える。「このことを考えてみる、これはこしらえ上げたほら話でなく、本気で言っているのだということを。嘘を吐くことはゼウスの口は知らず、全てのことばは成就するのだ、お前も心して良く考え、決して頑迷 *authadia* が分別 *euboulia* に勝るなどと考えるな。」(1030-1035)

このように彼はプロメテウスの自由を求める抵抗精神を頑固、頑迷 *authadia*、権力に屈服することを思慮分別と断定する。

このヘルメースのことばを受けて、コロスも彼を説得しようとする。彼の身の上を案ずる余りとはいえ、彼女たちも本当には彼の心情を理解せず、時には厳しい批判者となってしまう。「私たちにはヘルメース様が時宜にかなったこと *ouk akaira* を言っておられるように思えます。あなたに頑迷 *authadia* を棄てて、賢い分別 *euboulia* を求めるように命じ

ておられるのですから。それに従いなさい、賢い人にとって過ちを犯しつつける *ex-hamartanein* のは恥ずかしいことですから」(1036-1039)。

しかしプロメテウスはこう答える。「そんな報せなどはよく判っている *eidōs* 私に向ってこの男は吠え立てたのだ。敵対する者が敵によってひどい目に遭ったとしても何も恥 *aeikes* ではないのだ」(1040-1041)。

このようにコロスたちすらプロメテウスの行為を過ち *hamartia* と考え、それに固執することを頑迷 *authadia* な態度であり、このようにその報いとして罰を受けることを恥辱 *aeikes* とみなしている。ところがプロメテウスは自分の行為は全てこういうことをわきまえてその自覚の上で行った行為であり、予期に反した失敗ではないことを重ねて強調している。ヘルメースはこれほどのプロメテウスの自由への強烈な意志が理解できないのか、それともあえて理解しようとししないのか、これを乱心した者の考えとことばだという(1054)。

そしてプロメテウスに襲いかかる運命の巻き添えにならぬようその場を去るようにコロスに勧めるが、プロメテウスの決意の固さを見て彼と運命を共にすることを決断した彼女たちはその勧めをきっぱりと断る。「どうして私に卑劣なことをするよう命じられるのですか？この方と共に受けるべき苦しみを甘受する積もりです。私は裏切者を憎むことを学びましたし、これ以上に唾棄すべきことはありませんから」(1066-1077)。

この決意の固さを知ったヘルメースは、これがコロスたちの自覚的な決断に基くものであることを改めて念を押し、彼女たちが禍いに狩り立てられても運命のせいにしてたり、ゼウスが不意打ちをしたなどと言うなど命ずる。「そうではない、お前たち自身がそうしたのだ。お前たちは良く判っていて *eidytiai* 愚かさ故に逃れ難い禍いの網の中に陥ったのであり、突然に知らずにそうなったのではないのだから」(1075-1079)。

全て判って *eidōs* 自覚的に行動したプロメテウスと同様に彼女たちも自覚的に *eidytiai* 運命を共にして、ゼウスの不法な *ekdikos* 仕打ちを母テミスに訴え叫ぶプロメテウスと一緒に大地に呑みこまれていく。

## まとめ

上に概観して来たように、「縛られたプロメテウス」は誇り高き古き神の一人プロメテウスが、新しく神々の支配者となって専制的な権力を奮うゼウスに反抗して人類に火を盗み与え、そのために罰として岩山に磔になるという神話を素材として、それにアイス



キュロスが hamartia という要素をつけ加えて悲劇に作り上げたものである。彼の行為が hamartia でありそれがこの劇の重要な主題であることは、劇の冒頭のクラトスのことばで明らかにされている。ところで「悲劇」と「ハマルティアー」とを並べて考える時に直ぐに気がつくのは、アリストテレスが「詩学」で述べている「すぐれた悲劇」の定義<sup>(23)</sup>である。それは彼によれば「善良な人が、大きなハマルティアーによって、幸福から不幸へと変転するという単純な筋を持つもの」でなければならない。そしてこの場合のハマルティアーが何を指すかについてはしばしば論議されて来たが、一般にそれは「過失、判断の誤り」を意味するものとされて<sup>(24)</sup>、その代表的なものがソポクレスのオイディプース王のものだとされている。

ところが、人類の恩人である善良なプロメーテウスが、その自己犠牲的な行為の結果、磔という不幸な運命へと急転し、しかもその行為がハマルティアーに基づくものだということを自他共に認めているのに、この劇はアリストテレスの定義による悲劇の代表例にふつう挙げられていない<sup>(25)</sup>。これは私の考えによれば、主人公が神であり、既に運命の急変は劇の外で終わっており、劇中にはその結果しか示されないということのためだが、それ以上にこのハマルティアーが hekon, hekon と主人公の自覚的な意志によるものであることが明確に示されているからでもある<sup>(26)</sup>。たとえ悲劇の原因が自己の中にあるにせよ、それが自分の意図的行動の結果であることが自認されている以上は上の定義にはうまく収まり切れない。

しかしプロメーテウスの激しい独立の精神、不服従、崇高な自己犠牲はやはり強い感銘を我々に与え、これが一つの悲劇作品として高い水準にあることは否定できない。そこでこのハマルティアーがこの劇でどういう意図を以って用いられているのかを改めて考えてみたいのであるが、この問いに対する示唆を与える文章が同じアリストテレスの「ニコマコス倫理学」の第九卷第八章にある<sup>(27)</sup>。

アリストテレスはここで正と不正を論じながら、そこに行為者の意志が介在するか否かによって「意図的不正」hekousion adikema と「非意図的不正」akousion adikema とに分けて、それが意図的になされた時に不正行為となるといっている。彼は更に他者に害を及ぼす行為を「不運、災難」atychema 「過失」hamartia 「不正」adikema の三つに分類して、それぞれ害悪を与える行為の原因が行為者の外にある場合、内にあるがそれを知らなかった場合、そして知ってはいたが故意に行ったのではない場合と説明している。しかし特にその有害な行為が「わざと選択的に」ek proaireseos 行われた時に、その人間は不正 adikos か

つ邪悪 *mochtheros* だとしている<sup>(28)</sup>。

またある行為に行為者の意志が働いていたかどうかは、その典型的な例として殺人行為が考えられるが、この点に関しては当時のギリシアでは「故意の殺人」*hekousios phonos* と、「過失致死」*akousios phonos* とは明確に区別され、後者はハマルティアによるものとされて量刑が軽減されている<sup>(29)</sup>。それ故にある行為を「意図的」*hekon* に行ったか「非意図的」*akon* に行ったかということはその行為を裁く場合の重要な判定要素であることは明らかである。そして前五世紀から四世紀にかけての弁論術の発達によって厳密に規定されるようになったこの *hekon*, *akon* という形容詞は、前五世紀の悲劇の中でもその言葉の重みを既に持っていたと考えて間違いないだろう。たとえ概念の抽象化が後代のものであっても、人間の精神行動の洞察力にすぐれた悲劇詩人は、既にこれらの言葉の持つ重要性を、その厳密な概念規定が未分化のままに鋭敏に感じ取っていたと言って良いだろう。そして以上の点を考慮に入れた上ではじめて、プロメテウスが"*hekon hekon hemarton*"(266)と断言したことばの意味が伝わって来るのである。

始めにも述べたとおり、プロメテウスの行為をどう評価するかということは、その評価をする者がゼウスとプロメテウスとの対立の間どの位置に自分を置くかに関して来る。そしてアイスキュロスはそれぞれ異った立場にある登場人物の口を通して彼の行為を異った角度から評価させて、その本質を浮き上らせるという巧みな手法を取っている。

この観点から注目されるのは、プロメテウスの行為が *hamartia* とされているばかりでなく、彼が飽くまでも不服従の態度を貫いていることが「頑迷」*authdia* 「傲慢」*hypsegoros* であるとして非難され「過ちつづけること」*exhamartein* とされている点である。とりわけこの非難が敵のみならず、彼に一番同情を寄せて遂には彼と運命まで共にするコロスから言われている点が重要である。「自由な神」としての誇りをかけて孤独な戦いを続けている彼にとって、実はこの味方からの非難が一番手厳しかったのではあるまいか。もし彼の決意が揺ぐ時があったとしたら、この妥協の呼びかけの時であったろう。しかし彼が妥協し頑固さを捨てて謙虚になるべき時は、ゼウスもまたそれを学んだ時であるということを彼は知っていた。

それ故にこそ彼は一方的な妥協を排し、挫けそうになる心を励まして *hekon hekon* と「自分の意志で自覚的に」その行為をしたのであって、全ての責任が自分にあるのだという点を強調し「知らずに過失を犯した」のではないのかという親切ごかしの情状酌量<sup>(30)</sup> や取りなしを断固として拒否したのである。

正にこの点にプロメテウスの誇りと自負がかかっているものであり、この言葉にはペルシア戦争に自ら参加して僭主ヒッピアースの帰還を阻止したという経験を持つ詩人の自由人としての誇りが託されているのではないだろうか。

註

- (1) この劇が三部作の第一部である点には異説もあるが、大体受け入れられている。  
Cf. Ferguson, J.; *A Companion to Greek Tragedy*, p.113.
- (2) アポロドーロス『ギリシア神話』1.7.1.
- (3) ヘーシオドス、『仕事と日々』42ff.
- (4) ヘーシオドス、『神統記』217-222.
- (5) ヘーシオドス、『神統記』506-512.
- (6) Loeb は "scatter-brained" と訳している。
- (7) L-S, cf. Rose, *A Commentary on the Surviving Plays of Aeschylus*, の9の註、  
Farnell, L.R.; *The Paradox of the Prometheus Vincetus*, p.47  
Fitton-Brown, A.D.; *Prometheia*, p.57.
- (8) 35, 96, 224 他。
- (9) プロメテウスがそびえ立つ巨大な人形の姿で舞台に置かれ、俳優がその後から声を出していたという演出は今では支持が少ない、既に三人の俳優の時代に入っていたと考えられている。 Lucas, *The Greek Tragic Poets*, p.107
- (10) この劇の中にエンペドクレスやピタゴラス派の思想の影響を見る考えがある。  
Ferguson, op.cit., p 105, Lucas, D.W.; *Aristotle, Poetics.*, p.57.  
Thomson, G.; *Prometheia Aeschylus*, p.131.
- (11) *amplakema* は *hamartia* と同じく "an error, offence" を意味する (112,386,620)。他に *amplakia* (563)と、この意味に近い "charge" という意味の *aitiama* (194, 255)もプロメテウスの行為に関して用いられている。
- (12) Ferguson は旧約聖書の「ヨブ記」の構成との類似を指摘している。  
Ferguson, J.;op.cit. p.111, 121. この劇との影響関係を立証することは困難であるが、相互に強い類似性があることは明瞭で、この点の比較論究は可能であろう。
- (13) Rose, H.J.;op.cit., p.263.
- (14) Rose は Acts, 26,14 と比較している。 cf. Pindar. p.2.94.

(15) これは独裁者が法に束縛されずに専制的にふるまうことを意味している。

Rose, H.J.; op.cit., p.267.

(16) Loeb に従わず O.C.T. (331)の panton という読みを採る)

(17) 「狂気」と「病気」の形象については Fowler が述べている。

Fowler, B.H.; *The Imagery of Prometheus Bound* , p.175 ff.

(18) Rose, H.J.; op.cit. p.271.

(19) Rose, H.J.;op.cit., p.284.

(20) cf. 854, Supp.227.

(21) Agamemnon, 177.

(22) Arrianus, *Anabasis*, 4.11.8,al.; Farnell, L.R.; op.cit.,p.44.

(23) Aristoteles, *Ars poetica*, 1453a.

(24) Lucas, D.W.; *Aristotle Poetics*, p.145:

Dawe, R.D.; Some Reflections on Ate and Hamartia , p.90

Farnell, L.R.; op.cit., p.45. Fitton-Brown, A.D.;op.cit., p.57,25.

(25) Dawe, R.D.; op.cit., p.94.

(26) Adkins, A.W.H.; Aristotle and the Best Kind of Tragedy, P.88.

(27) Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, 1135b.

(28) Stinton, T.G.W.; *Hamartia in Aristotle and Greek Tragedy*, p.230.

(29) Antiphon, *Tetralogia*, ll.1, et al.; Platon, *Leges*, 865a.

cf. 村川堅太郎、「古代ギリシア市民」 p.64.

(30) Stinton, T.G.W.; op.cit., "extenuating circumstances" , p.232.

I I - C - 2 『救いを求める女たち』におけるダナオスの娘たちとアイギュプトスの息子たち

まえがき — 女性の自由意志と民主的精神 —

ダナオスは、アルゴス出身のイーオーがゼウスに愛されて身ごもりエジプトに来て生んだエパポスの子孫であったが、兄弟アイギュプトスとの王位争いに負けてアルゴスに逃れその地の王となった。アイギュプトスの50人の息子たちはダナオスの50人の娘たちとの結婚を求めたが、娘たちは婚姻の夜に父王の命令で夫たちを殺し、その首をレルネーの沼地に埋めた。ただ一人だけその命に背いて夫を助けた娘の子孫から後にヘーラクレースが生まれた。

アルゴスの近くのレルネーの沼沢地にまつわる上記の因縁物語を題材にして、アイスキュロスは従兄弟との結婚を嫌ってエジプトからアルゴスに逃れる娘たちを主題にした劇を書いた。従来この劇は女性の結婚嫌いを主題にしたものと解釈されてきたが、この論文では娘たちは氏族制度の都合で一族の男性に屈従した状態の結婚生活に閉じこめられることを拒否して逃亡したのだと説明する。この劇では娘たちは自由を求め自己の権利を強く主張する女性として描かれ、彼女たちを保護する王ペラスゴスも民衆の意志を尊重する民主的な王として表されている。王は強大なエジプトを敵に回し、戦争の危険を冒してまでも自由な精神を貴ぶ民衆の意志に基づいて娘たちを保護する決意を固める。

アイスキュロスの *supplices* は、コロスを主体とするその劇構成と、登場人物の動きの一見未熟とも思われる扱い方から、それは悲劇が *dithyrambus* から発達して俳優がコロスから独立し悲劇の体裁を整えてゆく過程を留めているものとみなされて、彼の初期の作品の一つであると長く考えられていた<sup>(1)</sup>。しかしこの考えは1952年発表のパピルス資料の示す事実によって根本から根拠を揺がされ<sup>(2)</sup>、現在ではこれはむしろ作者の後期の作品であって *Septem* と *Oresteia* との中間に位置するもので、B.C.463年頃に上演されたものと広く考えられるに至った<sup>(3)</sup>。この考えは、作品の中にしばしば表われるアナクロニスティックな民主政体に関する言及、アルゴスに対する好意的な態度などから当時の政治状況とも一致するものとして支持する意見も多い<sup>(4)</sup>。

悲劇を研究するには、このように外的な資料によって作品の解釈の一助にしたり、また内的な資料から外的な資料や当時の政治的歴史的状況を論じたりする二つの方法があ

る。作者の思想を論ずる場合には作品そのものの内的資料が重視されるべきことはもちろんであるが、ポリスの日常生活と深いかかわり合いを持っていたギリシア悲劇の性質上、当時の政治的状況は軽視できない判断材料であり、特に上のパピルス資料から明らかにされた作品上演年代は重要な材料である。私はこの小論で *Supplices* がアイスキュロスの後期の思想的に円熟した時の作品であるという前提に立ってその思想内容を論じてみようと思う。

*Supplices* も他の多くの悲劇と同様に神話を素材にしてそれに新たな生命を吹き込んである。この原形となっている神話の概要はアポドーロスの *Bibliothèque* から知ることができるが、それによればダナオスの娘たちについての物語は次のようなものである。

「イーナコスの娘イーオーはアルゴスのヘーラーの女神官であったが、ゼウスは彼女を愛し、彼女はヘーラーの怒に触れて祖国を追われ、牝牛の姿でエジプトに至りそこでゼウスの子エパポスを生んだ。その子孫の双児の兄弟アイギュプトスとダナオスとは王権をめぐって争い、ダナオスは 50 人の娘たちを引き連れてエジプトを去り、父祖の地アルゴスに來た。彼はこの地で王権を譲られ、あるいは征服によってアルゴス王となった。一方アイギュプトスの 50 人の息子たちはアルゴスに來て和を求めダナオスの娘たちを妻にしたいと乞うたが、ダナオスは娘たちに命じて結婚の夜にそれぞれの夫を殺させた。ただ一人ヒュペルムネーストラは父の命にそむいて夫リュンケウスを助けたが、他の娘たちは父の命令どおり夫たちを殺し、彼らの首はレルネーの泉に葬られ、彼女たちは競技の勝利者たちにそれぞれ与えられた。ヒュペルムネーストラとリュンケウスとは後に赦されて一緒になり、アルゴスの王位につき、ヘーラクレスの祖となった」<sup>(6)</sup>。

この神話はアルゴスの近くにあるレルネーの湿地帯を干拓し、それまで水に乏しかったアルゴスに水を引いて灌漑したダナオス王の事蹟を神話化したものと考えられ、ヒュペルムネーストラ以外の 49 人の娘たちの名も、レルネーにある多くの泉の名であって<sup>(6)</sup>、そこに葬られたという彼女らの夫たちの首は流れの源 *head* を意味するのだという説明もある<sup>(7)</sup>。またこの伝説全体も女性だけが参加する祭儀 *Thesmophoria* の起源を説明する原因譚 *aetiology* であるとも言われている<sup>(8)</sup>。

アイスキュロスは悲劇上演の作法に従ってこの既存の伝承を用いて、それに自分の解釈と思想を織り込みながら *Danaides* 三部作を作り上げた。不幸にしてこの三部作の第一編である *Supplices* 以外には僅かな断片しか残っていないので、我々はアイスキュロスがこの素材をどのように使って三部作全体を作り上げたかを知ることができないが、その構成

のあらまは現存の *Supplices* を分析し他の作品 *Oresteia* や *Prometheus Vincit* などと比較することによってうかがい知ることができるであろう。とにかくその物語の大筋は民間に流布していた様々な伝承の集約ともいべきアポロドーロスの神話と大差はないだろう。アポロドーロス自身資料を悲劇などから集めているものと考えられるからである<sup>(9)</sup>。この伝承が *Supplices* においてどう扱われ、それにどのような解釈が加えられているかを研究することによって、作品全体に表現されていたアイスキュロスの思想も明らかになって来るだろう。

*Supplices* の筋は、アイギュプトスの息子たちとの結婚を嫌ったダナオスの娘たちが追手を逃れて父ダナオスに連れられてアルゴスに上陸し、その土地の王の保護を求めて嘆願する話である。この物語の後半の部分、すなわち娘たちによる夫殺し、ヒュペルムネーストラーとリュンケウスの結婚の話が三部作の第二編 *Aigyptioi*、第三編 *Danaides* で展開されるのであるが、それぞれ独立した内容とそれ自身で完結するテーマを持つ三部作の各編をつなぐものが、それらの素材になっている神話なのである。

この神話は過去に起きた神々が関与する事件を発端として、現在の登場人物がまき込まれた争いと苦難を舞台の上に展開し、その解決を将来に予見するという形式を取って提示される。その解決が劇の終りに示される場合とそれが暗示だけに終る場合とがあるが、時間の流れが常に舞台の上で念頭に置かれていることが神話を素材とするギリシャ悲劇の大きな特徴であり<sup>(10)</sup>、特にその傾向はアイスキュロスの三部作に著しい。

三部作という形式はこの時の流れを具体的に示す上で特に有効であり、現在の事件の中で過去の事件が果す重みは非常に大きい。それ故にアイスキュロスの劇でコロスはしばしば過去の神話に言及し、神々への祈りの中でその将来の解決を暗示する。この時間的要素を念頭に置きながら、それぞれ独立した各編がどのような全体的に統一したテーマを持っているか考えなければならない。

*Supplices* 自体の解釈に関しては、それが結婚を嫌って逃れた娘たちの話であることから自然に、*misogamy*、男女の争い、ギリシアとオリエントの結婚制度の相違、母系制社会から父系制社会への移行期に失われた女性の権利などが問題になっていると様々に論ぜられて来た。更にこれに関連して民主制体やアルゴスとの外交関係も議論され *Danaides* 三部作としての全体像をつかむことは容易ではない。

*Supplices* の特徴は、1952 年以前に支配的だった初期作品説の重要な根拠となっていた *lyrical tragedy* としての性質、すなわちコロスの部分がとびぬけて多いという点にある

(11)。そして残りの部分もコロスが加わらない部分は(911-965)のペラスゴスと伝令の会話だけであり、その間もコロスはずっと舞台上に登場し続けている。結局主役は50人の娘たちのコロスであって、彼女たちの主張や訴えの中にこの劇のテーマと作者の思想が表われているはずである。以下の本文では特にコロスのことばを中心にその意味を分析しながら劇全体のテーマを追求してみようと思う。

なお本文中の引用と要約は全て筆者の試訳と解釈によるものであり、その際 Loeb の訳と Rose の commentary を主に参照したが、異説のある時は大体 Rose に従っている。

## 1. パロドス(1-175)

嘆願者の装いをしたダナオスの娘たちからなるコロスが登場し、自分たちが何者であるか、なぜこの地に逃れて来たかを説明する。彼女らがエジプトを去りこのアルゴスにやって来たのは殺人などの罪で追放に処せられたためではなく、いそこであるアイギュプトスの息子たちとの不敬な結婚 *asebes gamos* を嫌って自分から進んで *autogenei* 男を逃れるためである(6-10)。彼女たちは劇の冒頭で簡潔に自分たちの行動の理由を説明しているのだが、この *autogenei* ということばが様々に解釈されているために(12)、彼女たちの行動の説明をあいまいにし結局は劇の解釈にまで影響を与えている。私は後に述べる論拠から、自由意志によって結婚を逃れて来た彼女たちがこの言葉で強調しているのだと考える(13)。

つまり彼女たちは不敬な結婚を逃れて自分の意志で逃れて来たのであるが、なぜそれが不敬な結婚であるかという、それはアイギュプトスの暴虐な *hybristes* 息子たちが従姉妹たちを我がものにしようとして、その意に逆らって *akonton* 婚礼の床に上ろうとするが、それは *themis* の妨げるところであるというのである。これはいとこ同士の結婚が法に反するというのではなく、娘たちも父親のダナオスも望まぬ結婚を無理強いに強行しようとするのが掟に反し不敬なのであり(14)、その故にゼウスの保護を求めているのである。

コロスは第一のストロペーで、彼女たちの先祖エパポスとその母イーオーとアルゴスとの関係を述べてこの地に逃れて来た理由を示す。これは長い時間の流れと、エジプトとアルゴスの間に横わる広い空間の拡がりの中に自分たちの位置づけをして、それを観客に想起させる *mnaomai*(52)ためのものである。そして自分たちをテーレウスに追われるメーティスになぞらえて、鷹に追われる鶯のようにエジプトから逃れて来たと語る。ここでコロ



スは氏族の神々に祈り求める。

「さあ、一族の神様がた、正しいことを見そなわして良くお聴き下さい。

若者たちが不当に *par'aisan* 望みを遂げることをお許しにならず、

暴虐 *hybris* も真にお憎みになって、

結婚に対して公正 *enikoi* であられますよう」(77-82)。

ここには娘たちの結婚観が述べられている。後でわかるように彼女たちは「家」の都合で本人の意志に反して縁組みをさせられることを不正なことと考え、それを強要することを *hybris* と見なして自分たちの意志で逃げて来たのである。コロスは次にうたう。ゼウスの意志は全く正しく、その愛は明らかであり、その心は計り知れぬものながら、定められたことは正しく成就される。ゼウスは人間を高い望みから破滅になげ込むが、それは神にとって何の力も要らない容易な業である。

「また人間の傲慢 *hybris* をご覧下さい。

古い樹の根が私たちとの結婚により、どのような若枝を生ずるか、

その頑なな心によって栄える様を、

また猛り狂う心を、逃れ得ぬ笞を手に取り、

企みによってその迷妄 *ate* を後悔させて下さい」(104-111)。

コロスがここに述べているのは、この結婚が強制によるものであることばかりでなく、傲慢なアイギュプトスの息子たちとの結婚からは、同じような子孫しか生じないという考えである。「古い *hybris* は若い *hybris* を生み、暴挙 *thrasos*、迷妄 *ate* を生ずる」というのがアイスキュロスの思想なのである<sup>(15)</sup>。

このような祈願をゼウスに捧げたのち、コロスはリフレインをまぜながら嘆きの歌をうたう。彼女たちは現在の自分たちの苦しみをヘーラーの怒りに追い立てられて異国をさ迷い歩いた祖先イーオーの苦難になぞらえ、彼女をゼウスが最後に救ったように今もまた自分たちを救う義務があることを述べる。また処女を守るアルテミスが自分たちを望まぬ結婚から守ってくれるように願い、祖先エパポスが彼女たちを未婚のまま征服されずに *adamatos* 逃げのびさせてくれるように祈る。そしてこの祈願が聴き入れられない時は、死者の神ゼウスの許に行くと、すなわちオリュムポスの神々が守ってくれなければ首を縊って死ぬ他ないと固い決意を述べる。

## 2. 第一エペイソディオオン (176-523)

コロスが以上のように自分たちの身の上を語り、一族とアルゴスとの関係を述べてこの地に嘆願者として来た理由を示した後に、父親のダナオスが登場し娘たちに嘆願の際の心構えの注意を与える。彼女たちは嘆願に来た外国人にふさわしく嘆願のしるしの杖を手にして、敬々しくはっきりと自分たちが殺人の罪で追われているのではないことを語らねばならない。慎しみ深い顔つきをして思い上らぬ *to me thrasy* 思慮深い *to me mataion* 言葉で話さねばならないし、従順であることを忘れてはならない。彼女たちは外国人で逃亡者であり、弱い立場にある者には尊大な口のきき方 *thrasy-stomein* はふさわしくないからである。

このようにダナオスが必要以上にくどくどと娘たちに自分たちが弱い立場に置かれていることをわきまえさせ、大胆すぎる不遜な態度に出ないようにと細かな注意を与えていることは、彼女たちが王女として自由な気位の高い性質の持主であることをうかがわせる。彼女たちは次にヘルメースに祈る時にも自由な自分たちに対して良い報せがもたらされるようにとその点を強調するのであり(221)、ペラスゴスに嘆願する時も臆することなくその意志を通して。

ダナオスは娘たちに祭壇の下に嘆願者として座り込むよう指示を与えるが、その彼のことばの中にこの結婚に対する彼の考えが述べられている。

「聖所に、同じ羽を持つ鷹を恐れて逃げる鳩のように、  
一族の者を汚す血を分けた敵を恐れて坐りなさい。

鳥が鳥を喰ってどうしてきよい潔かろうか?

望まぬ娘を望まぬ父親から *akousan akontos para*

奪って妻にしてどうして潔い *hagnos* と言えようか?」(223-228)

当時のギリシアやエジプトの慣習として同族の者との結婚が掟に背くことになったか否か、彼女たちはそれが原因で逃げるのかということが論議されているが<sup>(16)</sup>、ここではっきりしていることは娘たちも父親も述べているように彼女たちの意志に反して *akon* 結婚を迫ることが掟に反するのであり、道徳的にも宗教的にも浄いことではないと言っているのである。この意味でこれが不敬な結婚といわれる理由もうなずけるのであり(9)、この主張には結婚のみならず、人間の自由意志の尊厳に関するアイスキュロスの考えが表われているといえよう。

ここにアルゴスの王ペラスゴスが登場する。彼は異国の女性が祭壇に嘆願者として坐っているのを見てその目的を問い質す。まず王は自分がアピアすなわちペロポネーソスのみ

ならずピンドス、ドードーネにまで至る広い地を治める者であることを名乗り、とりわけアピアの地についてのいわれを強調する<sup>(17)</sup>。これに対してコロスは王との間の会話の中で少しずつ自分たちがかのイーオーの子孫であり、アルゴスに縁の深い一族であることを明らかにする。この冗漫とも見える長たらしい会話はむしろ神話の過去のできごとを強調することによって、現在との結びつきを印象づけ<sup>(18)</sup>、現在を浮き上がらせる手法であると考えられる。

ペラスゴスが重ねて嘆願の目的を尋ねるのに対してコロスは次のように答える。

コロス「アイギュプトスの一族の女奴隷にならないためです」。

王 「それは憎しみによるものか。それとも掟に背くことだということか?」

コロス「誰が自分の主人を友人とみなすでしょうか?」

王 「だが一族の力はそうやって栄えるものだろうか」。

コロス「でも運の悪い時には簡単に暇を出されてしまいます」(333-339)。

アイギュプトスの息子たちとの結婚が一族の財産を外に出さないという便宜上の理由に基く以上<sup>(19)</sup>、彼女たちが自分の意志に反して結婚した時に体の良い奴隷と変らない状況に置かれてしまうことは明らかである。自尊心の強い王女たちが死を賭してもそれを拒否することは当然であろう。この確信に立って彼女たちは正義が自分の側についていると王に断言するのである。

これに続く kommos (344-417)で、コロスは王に決断を迫ってうたう。彼女たちは狼に追われて峻しい岩に登り助けを求める牝牛に自分をたとえて王の保護を求めるが、王はそれがこの国に予期せぬ争い neikos をもたらすことを恐れてためらう。コロスはゼウスの娘テミスにかけて自分たちが無害であるというのだが、王は彼女たちが王の家の炉端に嘆願者として坐っているのではないから、自分の一存で決めるべきことがらではなく、これは国家 to koinon の穢れに関することだから市民全体が考えるべきことだという。ところがコロスは王が国家、王が全国民である sy toi polis、sy de to demion(370)とあって統治権が王一人のものであることを強調し、嘆願を拒否することによって招く穢れ agos に気をつけよと迫る。王はここで嘆願者を拒めば神々の怒りにふれて穢れ agos をまねき、助ければ戦いにまき込まれて災い blabe をこうむるという重大な二者択一の危機にさらされ途方にくれ、為すべきか為さざるべきか大いに恐れ悩む。

嘆願者を守るゼウスの怒りを重ねて口にするコロスに対して王は、アイギュプトスの息子たちが自国の法によって彼女たちに対する支配権を持っているのではないか、親権者

kyrioi ではないのかと法的関係について質し、その点について申し開きをすべきことを注意する。これについてはアイスキュロスが当時のアテナイやスパルタの法律を念頭に置いて書いているのだとされているが<sup>(20)</sup>、たとえそうだとでも現に父親が生存していてこの結婚に反対している以上彼女たちはその法律からは自由である。当時のエジプトの法律については良く知られていないが、エジプト王家の近親婚からこういう風習があったことは確かである<sup>(21)</sup>。しかしそれが制度化されていたかどうかは明らかではない。アイスキュロスはそこに詩人の想像力を働かせて悲劇の材料を見つけたのであり、そういう異国の風習になじまないギリシア的な自由の精神と気概を持った女性を描き出そうとしたのである<sup>(22)</sup>。

事実、コロスの次のことばはそういう法的問題に関する論議を拒否している。彼女たちは男たちの権力の下に服従することはしたくない。気に入らぬ結婚から逃れて星をたよりに海を渡って逃げて来たのだから、王も正義を味方に選び取って神々への敬虔を決断せねばならないと。彼女たちはそういう法があろうとなかろうと受け入れ難いことは拒否し、そういう法の及ばない地にはるばる逃れて来たのであるから。

しかしペラスゴスは自分一人で国運をかけた決定を下すことはできないので、市民たちと相談してから決定しようという。「外国人を大切にしてお国を滅ぼした」といわれないためにも。それに対してコロスは正邪を量るゼウスは正しい者には義を、悪人には不正を分け与えるのだから、正しいことを行って後悔することはないと説く。このようにいずれを選んでも国の安全に大きな災いをもたらす結果を招くという重大な決断の瀬戸際に立たされた王は、海底深く潜って獲物を探す漁師のように<sup>(23)</sup>、目をはっきり開いて国の安全を守るための思慮の底深くまで降りて行かなければならぬと答える。彼女たちを争って戦いが起ることは防がねばならないし、彼女たちを引き渡して神々の怒りと穢れを招いてもいけない。王はこの深刻な決断の責任を負わされて、一人で思案するために退く。

王が思案している間にコロスは彼の決断を促がしてうたう。王がよく思案して正しい敬虔な保護者となることを選ぶよう、男たちの暴虐 *hybris* を悟って神々の怒りをおそれ自分たちを引き渡さぬように。馬を手綱で引くように彼女たちの髪飾りをつかんで神像のもとから正義をないがしろにして引いていくのを見過さぬように。王がしたことと同じ報い *themis* が子孫に返って来るのであるから<sup>(24)</sup>、ゼウスの正義の力を考慮するようにと(418-437)。

思案を済ませたペラスゴスは再び登場して自分の決意を語る。彼は船の比喻を用いてそ

の決意を語るが、彼は浅瀬に乗り上げた船のように進退きわまっていて、嘆願者を見棄てて神々に敵対するにせよ、助けて外敵と戦うにせよ、いずれを選んでも大きな戦いをすることは必然 *ananke* である。彼はこの事件とまるで船の木材がしっかりと釘でとめられているように関り合いを持っており、苦痛なしにそれから逃れることはできない。彼はこの状況判断に立って、いずれの決断を下しても大きな痛手を蒙らずに済むことはないと覚悟するが、神々の怒りにさえ触れなければ、財宝を守るゼウス *Zeus ktesios* の加護により失った損失は回復できるだろうから、弁舌の説得力 *mythou mytos thelkerios*(447) にたよって、できるだけ争いを避け同胞の血を流さずに切り抜けようとする(438-454)。

この王の決断を固めさせようとしてコロスは最後の手段として、確実な保証が得られなければ神像に帯をかけて首を吊ると言って脅す。王は自分の置かれた状況を押し寄せる河の水、底知れぬ深さの海にたとえてその解決の困難なことを述べる。娘たちの死による穢れを避けようとするれば、アイギュプトスの息子たちと戦いを交えなければならないが、それは「女たちのために男たちの血を流す」(477)ことだからである。ともあれ、王は嘆願者を守るゼウスを恐れて娘たちを守ることに決め、ダナオスに対して他の神々の祭壇にも嘆願のしるしを置いて来るように勧める。それは市民たちがその印を見て娘たちに同情を寄せ「男の群の暴虐 *hybris* を憎み」(487)、この決定を下した王を批判しないためである。人は弱い方に好意を寄せるものであるから。ダナオスはこの王の勧めに感謝して、その祭壇に行くために市中を安全に通行できるよう案内人をつけてくれるように王に頼む。自分たちの姿がギリシャ風の姿と異っているため危険を招かないようにと考えたからであるが、嘆願者にとってもあまりにも大胆な行動 *thrasos* は危険である。王は恐れ惑う娘たちをなだめて、自分も国民を集めて彼らが娘たちに好意を持つよう説得しようとする。王といえども説得 *peitho* と幸運 *tyche* に頼らなければ事をうまく運ぶことができない(532)。

### 3. 第一スタシモン(524-599)

ペラスゴスが立ち去った後でコロスはゼウスの恵みを求めてうたう。至高の神ゼウスが自分の子孫から男たちの暴虐 *hybris* を防いでくれるように。娘たちにとって禍い *ate* そのものである彼らの黒い船を海に沈めてくれるように。イーオーに対する昔の愛を思い出して、その古い民族の末裔である彼女たちの「女の主張 *to pros gynaiikon*」(531)を見まもって助けてくれるようにと<sup>(25)</sup>。次にコロスは六連にわたる歌によって、祖先イーオーの苦難の旅のありさまを語るが、これはパロドスでの歌とは異なり、その苦難からイーオーが

最終的には救い出されたように、計り知れぬゼウスの導きによって彼女たちもまた、現在の苦しみから救い出されるようにという願いに重点が置かれている。イーオーに救いを与え一子エパポスを授けたように、生命を与える *physizoos* ゼウスを彼女たちは讃えてその恵みを自分たちの上にも求める。

#### 4. 第二エペイソディオン (600-624)

そこにダナオスが市民たちの集会から戻って来て、その集会の様子と決議の内容とを娘たちに伝える。それによると市民たちは、彼女たちを自由な市民として受け入れることを全員一致で決議し、彼女たちの身分の保障と安全を約束した<sup>(26)</sup>。そして彼女たちに暴力が加えられた時に助けない者は市民権を失い *atimos* 追放されることになった。王ペラスゴスは嘆願者を守るゼウスの怒りを述べて、市民たちがこういう決議をするよう説得した。この説得力のある話しぶり *eupithes strophe*(623)に市民は耳を傾けたが、それを成就させたのはゼウスであった。このように市民の自由を守らぬ者は自分の自由を失うこと、こういう自由な市民をある行動に導くためには説得力 *peitho* が必要であるが、その陰にはゼウスの力が働いていると、ここでも敬虔に裏づけられた自由と民主主義の理念に関する作者の思想が表われている。

#### 5. 第二スタシモン(625-709)

市民の保護の保障を与えられたコロスは感謝してアルゴスの国のために祝福の祈願をしてうたう。ここにはどのような状態が当時のポリスにとって理想とされているかという考えが述べられている。

コロスはゼウスの嘆願者である自分たちを憐れんで好意的な決議をしてくれた市民たちを神々が守って、この国が戦火から守られ人々が死ぬことがないようにと祈る。市民たちは彼女たちが女性であるからといって男にくみして女の論争 *eris gynaikon*(645)を侮ることはしなかった。彼らはゼウスの抗い難い監視者である報復 *praktor* をおもんばかりで彼女たちの言い分を聴いたのである。ここでは自由な市民であり民主的な手続きを重んじるアルゴスの市民が、女性に対して公正な態度を取っていることが評価されている。

またコロスは、国土が疫病などから守られ人々の生命が全うされ、国の内部での争い *stasis* によって人々が死ぬことがないように祈る。これは国の平安に関して作者が重視する重要な要因であり、争いは説得によって民主的に解決されるべきだと考えられている。

このような平和の祈願に加えて人口の増加とそれを養う家畜と作物の豊かな実りをコロスは祈るが、更に重要なこととしてこういう繁栄を守り維持するものとして市民の民主的な思慮ある行動がうたわれていることは注目に値する。

「国を治める市民が、市民の権利を揺らぐことなく守りますよう。

先見に富み、公共のためを図る政治により、

他国民に対しても、アレースが武器をとる前に、

災いを与えずに、公正な裁きをつけますように」(698-704)。

内外の戦いから国土を守るのは、結局は民主的な政治と他国民に対しても守られる公正な *eusymbolos* 裁きであること、またこの公正な態度は敬神によって裏づけられていることが強調されている。

#### 6. 第三エペイソディオン (710-775)

この時ダナオスはアイギュプトスの息子たちの接近を認め、そのことを娘たちに告げる。娘たちは怖れて悪いダナオスの励ましにもかかわらず脅えるばかりであるが、彼女たちのことばの中にアイギュプトスの息子たちの性格が描き出される。

「彼らは禍いで淫らな一族で、戦いに飽くことなく(741)、

邪悪な狡滑な心を持ち、不純なことは鴉にも似て。

敬虔の念など持ち合せず (750-2)、

非常に高慢で不敬な心に猛り狂う有様は、

犬のように思い上って *kynothrases*、神々をものともせず (757-759)

向こう見ずな不敬な野獣のような激情を抱いている」(762-3)。

娘たちに対して不当な支配権を主張して追いかけて来る彼らは、邪悪な不敬な高慢な野獣のような者たちとして表わされている。

#### 7. 第三スタシモン (776-824)

ダナオスが助けを求めて立ち去った後に、コロスは神々の救いを求めてうたう。

「アイギュプトスの一族の男どもが、耐え難い暴虐 *hybris* で、

私のあとを追いかけて走り、かまびすしい妄りがましきで、

逃げる私を力づくで *biaia* 捕えようとはやるのです」(816-21)。

娘たちは男たちが力づくで自分たちを乱暴に引っ立てて行こうとすることを恐れ嫌い、

このような暴力的な結婚を甘受する位ならその前に生命を断ってしまいたい。天に昇ってゼウスの雲に隣り合うか、塵のように消え失せたいと嘆く。ここでは暴力 *bia* に対する嫌悪が繰り返し強調されている (798、812、820)。

#### 8. 第四エペイソディオーン (825-1017)

ここにアイギュプトスの息子たちの伝令がやって来て娘たちを船に引っ立てていこうとする<sup>註27)</sup>。彼女たちが言うことを聞いて従わなければ暴力を用いて連れていくと伝令は脅し、娘たちは絶望の嘆きを上げる。

彼女たちが望もうが望むまいが *theleos atheleos*(862)、伝令は力づくで *biai biai te pollai*(863)、彼女たちを船に連れていくと脅すが、このような暴力 *bia*(831)の脅しに対してコロスは伝令をあるいはワニ(878)、あるいは二本足の蛇 (895)、毒蛇(896)、獣(898)、クモ(887)と呼んでその暴虐ぶり *hybrin —hybrizonta*(880-1)をなじることしかできない。

伝令が娘たちを引きずっていこうとするところにペラスゴスがやって来てそれを制止する。ペラスゴスは伝令が異邦人でありながら思い上った *phronema* 傲慢な振舞いをする事 *enchlein* を責めその罪を咎めるが、伝令は自分が失ったものを見つけて持って行くのだとその行為の正当性を主張する。王はそれが土地の神々に対する不敬な行為であることを指摘するのだが、伝令は他国の神々は崇めずそれが不敬になることも認めない。そしてこの争いのために多くの男たちが生命を失うことになるだろうと脅す。それに対して王はもし彼が娘たちを敬虔な言葉で説得し、彼女たちが自分の意志で *hekousas* (940) 快く連れて行かれるなら良いが、暴力によって連れていくことはならないと、自由な人間の口 *eleutherostomos* を通して断言する(940-9)。これに答えて伝令は戦いと男の側の勝利を予言して去る。ここにもまた自由意志を尊重し説得の力を信ずる王の自由人の理念が述べられている。

ダナオスがまた現われてアルゴスの人々と神々の助けに感謝すると共に、娘たちに対してその若さの魅力 *opora* に気をつけ慎しみ深くして他人から非難されることがないように注意を与える。この注意は次の侍女たちのコロスのアフロディーテーの讃歌に連り、三部作の結末を予示する。

#### 9. エクソドス (1017-1074)

危機から救われたコロスはその喜びに神々とアルゴスを讃えてうたう。彼女たちはもは



やナイルの河を讃えることをせず、この国を流れて大地を潤し生命を育む河を讃える。そして動物や処女を守るアルテミスに祈って、アプロディーテーのために止むなく *hyp'anankas* 結婚させられることがないように望む。

しかし侍女たちのコロスは結婚がヘーラーと共にアプロディーテーの司るものであって女神は様々なたくらみを持って働きかけ、憧憬 *Pothos*、説得 *Peitho*、調和 *Harmonia* と愛 *Eros* がそれに協力するとうたう(1034-42)。説得 *Peitho* は民主制を支える政治技術のひとつでもあるが、男と女の争いを解決する知恵でもある。侍女たちは運命に定められていることは必ず成就し、ゼウスの考えは無際限で侵すことのかなわぬものであり、ダナオスの娘たちの将来も昔からの多くの女性と同様に結婚に落ちつくであろうことを暗示する。

娘たちと侍女たちのコロスは交互に *ionic meter* で歌いあって<sup>(28)</sup>、ゼウスの心の深さを述べる。娘たちがアイギュプトスの息子たちとの結婚を嫌ってゼウスに再び祈るのに対して、侍女たちは何が最善か誰にも分らないし運命はなだめ難いことゼウスの意志の測り知れぬことを述べて、神々のする事に関して何事も度を過ぎぬように教えさす。

アイギュプトスの息子たちとの結婚は死を賭しても拒否した娘たちではあったが、結婚そのものを否定しているのではなかった。娘たちの言葉の中にこの新たな展開は表われていないが、侍女たちは第二部の一時的な敗北の後に来るヒュペルムネーストラとリュンケウスの結婚のエピソードに触れて劇全体の流れを予示している。それを娘たちが今は理解できなくとも、祖先イーオーの苦難を救った同じゼウスの導きを信ずることによって彼女たちはその解決に導かれる。

「ゼウスの君が、

嫌なひどい夫との結婚を止めさせて下さいますように。

恵み深い力 *eumenes bia* をふるって

癒しの御手でイーオーをとどめ、

苦しみから救い出された方ですから」(1062-67)。

苦難の旅をさまよい続けるイーオーを抑えとどめて苦しみを癒したのはゼウスの優しい力 *bia* であった。アイギュプトスの息子たちの暴虐のもとでは暴力であった *bia* がゼウスのもとではこのような力として表わされている。これはまた同じことばに相反する二つの意味をもたせようとする詩人の巧みなアイロニーであろう。

コロスは現在のこの争いには勝利 *kratos* を女たちの方に与えるよう祈るが、それは無ければ無い方が良い肉親との争いにおける勝利という「禍いの中の良い方」(1069)であって

止むを得ないものである。彼女たちは正義には正しい裁きが伴うという確信を述べつつ退場する。

#### まとめ

上に作品の流れの中で調べて来たように、Supplices のテーマは単なる結婚嫌いの女性の逃亡劇ではない。暴虐なアイギュプトスの息子たちとの結婚を嫌って逃れて来た娘たちが父祖の地に救いを求める話ではあるが、アルゴスという土地を舞台にして自由と隷従、敬虔と傲慢、民主主義と圧制という対立の狭間に苦しむ人間をテーマにした劇であってアイスキュロスの他の劇にも共通した問題を扱っている。そしてこの劇に特に著しいのは自己の自由意志を重んじそれを侵されまいとして、死を賭して自己主張する女性の姿である。このために Supplices はコロスが舞台に出ずっぱりであるという特別な劇構成を取っている。この女性の意志の尊重と市民の政治的自由の尊重とは表裏一体をなして、共にゼウスへの敬虔に基いているというのがアイスキュロスの思想であると私は考える。この思想の構造を改めてまとめてみよう。

まず劇の冒頭でコロスが自分たちの行動を *phyksanoria*(8)と説明しているところから、彼女たちが男嫌いの *misogamist* であるという見解を一般に生ずる結果になったが、彼女たちが嫌っているのはアイギュプトスの息子たちとの結婚という特定のケースだけであって、伝承にもあるように彼らの死後にはふつうの結婚をしているし、アプロディーテーの結婚の呼びかけを拒否しているわけではない。彼女たちがこの結婚を嫌う理由は何度も繰り返し強調されているようにこの男たちが傲慢で乱暴で犬のように向う見ずな狡猾な連中だからである。ここに表われている性質は敬虔な人間の性質とは正反対のものであり、それ故にこういう男たちとの結婚は、それ自体不敬な結婚であって掟に背くものである。こういう結婚は同じように傲慢不敬な子孫を生じるだけであり新らしい *hybris* や *ate* を生ずる(104-110)。

また彼女たちがいとこ同士の結婚に断固として抵抗するのは、それが法に反するからというのではなく、単に一族の財産を一族の中に留めておくという目的だけのために、その自由意志が踏みにじられて彼女たちが女奴隷と変らぬ境遇に落ち入るからである(333-39)<sup>(29)</sup>。しかし男たちは彼女たちの意志を無視して、それを望まない父親の手から力づくで奪い取り海の彼方に連れ帰ろうと後を追いかけて来る。この力づくの暴力 *bia* と意志に逆らって *akon* ということばは彼女たちの恐れと嫌悪を強調するためにしばしば使われてい

る。

この絶望的な恐怖にさらされた娘たちは嘆願者のゼウスの救いを求めるが、彼女たちが直接に救いの手を期待するのはアルゴスの王ペラスゴスである。しかしこの王は娘たちの期待とは異なって独断で事を運ぶ専制君主ではなく、何事も市民の同意を得て処理する立憲君主として描かれている。王は嘆願者を見棄てて神々の怒りを買ひ穢れを受けるか、嘆願者を助けて国難を招くかという重大な決断を迫られるが、一旦助けることを決断すれば弁舌をもって市民を説得し得る英明な君主なのである。

つまりこの王は民主政治を体現するものとして *peitho* に訴え、アイギュプトスは圧制の象徴として *hybris*、*thrasos* を性質として持ち *bia* に訴える。この民主的な王はまじめに女性の訴え *to pros gynaikon*、*eris gynaikon* に耳を傾け、市民も娘たちを守るために国運をかけることを全会一致で投票している。そしてこのような女性をも軽んぜぬ公正な裁きが逆に内乱を防ぎ民主政治を守るのだとコロスは祈り讃えている。アイスキュロス自身の思想をここに読み取ることができるだろう。

王は他者の自由をも重んずる自由人としてその口からはっきりと市民の決議を伝令に伝え、アイギュプトスの息子たちと対決する。これは単なる男女の争いや結婚観の衝突などではなく、女性の自由意志を尊重するかしないかという態度に表われている民主精神と圧制との対決であると考えられる。

劇の第二編で王は、アイギュプトスの息子たちとの戦いで戦死したことになる<sup>(30)</sup>。しかしこれもアイスキュロスが王の死によって民主精神の敗北を表わしたのではなく、その仇は娘たち自身の手によって果され、アルゴスの民主的体制はダナオスの一族によって引き継がれたという結果になっている。このダナオスの娘たちが夫殺しの罪のために死後に冥府で水汲みの永劫の罰を受けたという物語りは後の時代の産物であり<sup>(31)</sup>、アイスキュロスの思想や前古典人の解釈とはほど遠い。むしろアイスキュロスは古典時代よりずっと自由であった古代の女性の地位を知っていて<sup>(32)</sup>、それを民主主義との関連において劇の中に表現したと考える方が正しいと思う。それが時代が下り、社会情勢が変わって劇の一部が失われるにつれて伝承があいまいになり解釈が混乱したのだろう。

劇の終りにあるアプロディーテーへの言及が第三部の解決への暗示であることについては詳しく述べる余地はないが、ここで *peitho* がまた違った役割を演じて、結婚嫌いになりかけた娘たちを愛に導いてこの争いに終りをもたらすことが予想される<sup>(33)</sup>。またこうい

う形での結末も結局はイーオーに自分たちをなぞらえて苦難からの救いを求めている娘たちに対するゼウスの解答であり、それが恵み深い *bia* であるとしている点<sup>(84)</sup> はギリシア悲劇らしい言葉の多義性を巧みに用いた技巧として興味深い。

註:

- (1) Kitto, H.D.F.; *The Greek Tragedy*, p.1, Kitto は *Supplices* が *lyrical tragedy* であって、西欧の劇の最古のものであると第2版まで記していた。
- (2) Garvie, A.F.; *Aeschylus Supplices, Play and Trilogy*, pp.1~28.
- (3) L-Jones, H.; *Aeschylus*, p.596. Garvie, op.cit.vi.
- (4) Ehrenberg, V.; *From Solon to Socrates, Prolegomena*, p.208.  
Diamantopoulos, A. は 493 年頃に遡らせている。
- (5) アポロドーロス、『ギリシア神話』II.1.
- (6) Thomson, G.; *Aeschylus and Athens*, p.298.
- (7) Harrison, J.E.; *Prolegomena*, p.620, n.1  
kephalai, the head or source of a river (L-S).
- (8) Herodotus, II.171. Lucas, D.W.; *The Greek Tragic Poets*, p.84.
- (9) アポロドーロス、『ギリシア神話』p.7.
- (10) Romilly, J.de; *Time in Greek Tragedy*, p.59ff.
- (11) Garvie, A.F.; op.cit., p.88, n.1 の詳しい註と数字を参照。
- (12) Lesky, A.; *A history of Greek Literature*, p.252. cf. *Italie, autogenes, insitus*.
- (13) L-S, *autogenes*, self-produced の意味を採って *kindred* の説明を採らない。  
cf. Garvie, op.cit., p.222.
- (14) Rose, H.J.; *Commentary*, p.19, n.37.
- (15) Aeschylus, *Agamemnon*, 763-771.

- (16) Thomsn, G.; op.cit., p.302.
- (17) Diamantopoulos, AS.; p.221、アルゴスの勢力範囲がアピアまで及び、またアピアがスパルタをも含むという表現は、スパルタに対する敵意を示すことになる。
- (18) Romilly, J.de; op.cit., p.11.
- (19) Thomson, G.; op.cit., p.304.
- (20) Rose, H.J.: op.cit., p.42.
- (21) Thomson, G.; op.cit., p.302-303.
- (22) Finley, J.H.Jr.; *Pindar and Aeschylus*, p.198.
- (23) Rose, H.J.; op.cit., p.44,408-409, sponge-fisherman のたとえ。
- (24) Italie, *Index*, themis , poena.
- (25) Loeb も Rose も the women's cause としている。
- (26) Rose, H.J.; op.cit. p.56, 610-612.  
ダナオスは決議の内容を三度繰返して彼の喜びを強調している。
- (27) この場面は詩人が外国人のことばをまねて難解なことばを用いたと思われるために、早い時期に誤写脱落が生じテキストが大変乱れている。  
Rose, H.J.; op.cit., p.68, 825-902.
- (28) Murray, G.;のテキストに従う. cf. Rose, op.cit.
- (29) Finley, J.H.Jr.; op.cit., p.197-8.
- (30) Lesky, A.; op.cit., p.252.
- (31) Thomson, G.;op.cit., p.305, Lesky, A.; op.cit., p.253, Garvie, A.F.; op.cit., p.234, Appendix.
- (32) 註 19, 註 22.
- (33) Smyth, H.W., L-Jones, H.; *Aeschylus*, Fragment 25 (44).  
Gagarin, M.; *Aeschylean Drama*, p.131.
- (34) Winnington-Ingram, R.P.; *The Danaid Trilogy of Aeschylus*, *J.H.S.*Lxxxix,1961, p.151.

まえがき

カッサンドラーはトロイア王プリアモスの娘であり、アポローンに愛されて予言の術を授けられたが、その意に従わぬために神は人々が彼女の予言を信じないようにした。トロイア陥落後彼女はギリシア軍の総帥アガメムノーンの愛妾とされ、アルゴスに帰国するが、帰国後王の暗殺を計画していた王妃の手に掛かり非業の死を遂げた。王宮の前で一人車の上に残された彼女は王宮の中で進行中の凶行について予言し自分を待ち受ける悲運について語るが、長老たちのコロスはその言葉を理解し得ない。捕虜となった彼女を奴隷として扱おうとする王妃に対して、王女であった誇りを依然として失なわぬカッサンドラーは、無用になった予言者の衣装をかなぐり捨てて自分を待ち受ける運命に向かって従容として赴く。

『アガメムノーン』の「前書き」と作品批評、カッサンドラーへの憐れみについて

現存するギリシア悲劇の大部分には hypothesis と呼ばれる前書きがついていて、それぞれの作品の解題、梗概、コロスの構成、場景、同時に上演された他の作品の題名、他の競演者の名、競演の順位、上演年代、コレーゴスの名などが記されている。これは作品の上演年代を知る上で決定的に重要な資料であり、アリストテレースの弟子のディカイアルコスやピザンティウムのアリストパネース(前 257 頃-180)などの手に成るものとされている<sup>(1)</sup>。これらの多くを書いたアリストパネースは、有名なアレクサンドリアの大図書館の四代目の館長であり、その膨大な蔵書を整理、校訂して、ホメーロス、ヘーシオドス、ピンドロスなどの、より正確な写本を後世に伝えた古代の優れた文献学者の一人である。

もしこれらの現存する hypothesis がすべて、アリストパネースたちによって書かれたままの姿を正確に伝えているならば、そこに記されている上演記録のみならず、作品解釈や批評もまことに貴重な研究の手掛かりとなるはずであろうが、現存の hypothesis は骨組みとなる上演記録の部分を除いては、中世の文法学者の書き加えたものであって、その資料的価値は少いと一般に考えられている<sup>(2)</sup>。

しかしたとえ古代の悲劇上演に関する資料としての価値は低いとしても、中世に伝わる多くの写本に接し、その克明な註釈を読み、自身も註を書き加えている文法学者たちが残

した作品の解説や批評を、一概に無価値と斥けてしまうことには疑問がある。むしろ社会制度も思想も異なる世界に生きた人々が、原典に直接触れた時に受けた感覚が、時代の制約を越えて我々にも共有できるものとなって反映されていると考えることも可能である。そしてその解釈や批評の部分に適切なものがあれば、それを作品研究の手掛りとして用いることも妥当な方法であろう。そういう予想の下にまず『アガ멤ノン』の前に書かれている hypothesis と、その原型をほぼ忠実に伝えているといわれる『テーバイに向う七人』の hypothesis とを比較し、問題点を探ってみよう。

### 『アガ멤ノン』の前書き

くアガ멤ノンはイーリオンに向かって出発する時に、クリュタイメストラーに対して、もしイーリオンを占領したら、その日のうちに烽火によって合図すると約束した。それゆえクリュタイメストラーは烽火を見張るために見張り番を雇って置いた。そして番人は(それを)見て報告し、彼女は長老たちの一団を召集し、烽火について語る。コロスは(長老たち)から成っているが、彼らは(報せを)聞いて勝利の歌をうたう。間もなく(使者の)タルテュピオスも到着して航海についての話を詳しく語る。するとアガ멤ノンが(戦)車に乗ってやって来る。そして彼にはもう一台の車が従い、それには戦利品とカッサンドラーとが乗っていた。アガ멤ノンはクリュタイメストラーと共に家の中に先に入り、カッサンドラーは王宮に入る前に自分とアガ멤ノンとの死、そしてオレステースによる母親殺しを予言し、(予言者の印しの桂の)冠をかなぐり捨て、死を覚悟して(家の中に)跳び込む、劇のこの部分は *ekplexis* (驚愕)と十分な *oiktos* (憐憫)を持っているとして嘆賞されている。特にアイスキュロスはアガ멤ノンが舞台の上で殺されるように(劇を)作り、カッサンドラーの黙せる死は彼女の死んだ姿で表わした。そしてアイギストスとクリュタイメストラーに関しては、クリュタイメストラーはイーピゲネイアの殺害について、アイギストスはアトレウスによる父親の不幸について、各々がその殺人に関して一つの要因であるとして(それぞれの立場を)断言するように作った。

この劇はピロクレースが(アテーナイの)アルコーンの年、第80オリュンピア紀の二年目(前459/8)に上演された。アイスキュロスは『アガ멤ノン』『コエーポロイ』『エウメニデス』とサテュロス劇『プロテウス』によって優勝した。コレーゴスはアピドナイの人クセノクレースであった。>

この中世の文法学者が加筆したとされる前書きに対して、文献学者アリストパネースの

書いた原型を保つとみなされる『テーバイに向う七人』の前書きを比較してみる<sup>(3)</sup>。

#### アイスキュロスの『テーバイに向う七人』の前書き

く劇の舞台はテーバイに設定されている。コロスはテーバイの乙女たちから成る。主題はテーバイ人を攻囲するアルゴス人の軍隊とまた勝利者たるテーバイ人、そしてエテオクレースとポリュネイケースとの死である。(この劇は)テアゲネースが(アルコーンの年)、第78オリュンピア紀(前468/7年)に上演された。(アイスキュロスは)『ラーイオス』『オイディプース』『テーバイに向う七人』とサテュロス劇『スピックス』によって優勝した。二等はアリスティアースが『ペルセース』『タンタロス』(アンタイオス?)と父親のプラティナーズの作であるサテュロス劇『力士』によって<sup>(4)</sup>、三等はポリュプラスモーンが「リュクールゴス四部作」によって得た。>

この二つを比較すれば容易に分るように、古代の前書きにあったと思われるものはいわゆる *didascaliae* と呼ばれる劇上演の記録に関するものであって、冗長な解説や批評は中世の文法学者、特に Thomas Magister などによるものであり資料的価値が乏しいとされている<sup>(5)</sup>。この見方に従えば『アガメムノーン』の前書きの中で本来のものは終りのパラグラフの部分だけということになる。

ところでアリストテレースの失われた作品群の中には同じ *didascaliae* という題名の書と、また「市のディオニューシア祭とレーナイア祭の勝利」という書があり、それらは劇上演の公式記録に基いて書かれ、アレクサンドリアの学者たちもそれに依って前書きなどの著作をしたと考えられているから<sup>(6)</sup>、もし前書きの中に純粹に記録資料以外の主観的な演劇批評が含まれていても、それが完全に後世の文法学者たちの加筆であるとは一概に断定し難く、むしろアリストテレースその人の解釈が形を変えて伝えられて来た可能性も有り得るのである。

そこで始めの前書きに関連して注目されるのは優れた悲劇についてのアリストテレースの定義である。「非常に優れた悲劇の構成は単純ではなく複雑なものであり、恐れと憐れみとを模倣したもの(なぜならこれがこの種の模倣に独特のものであるから)であるべきなのであるから、立派な人が幸福から不幸な状態に陥るように表わされるべきでないことはまず第一に明らかである。それというのもこれは恐ろしいことでも憐れなことでもなく嫌悪すべきことだからである。」これに続いて彼は真に優れた悲劇は、とりわけ有徳でもな



い人が悪徳によらず判断の誤りによって不幸に陥る筋を持ったものであり、その例はオイディプースやテュエステースなどのような名声と幸運に恵まれた人の悲劇であるとしている。彼は憐れみは(不幸になるのに)ふさわしくない人について、恐れは(我々と)同じような人について(感じられる)のだと言っている<sup>(7)</sup>。(Poetics,1452b28-53a17)

このようにアリストテレスが「我々と同じような人間が判断の誤りにより、幸福から不幸へと変る時、恐れと憐みを感じ、それが優れた悲劇の要件である」と述べるのを思い出す時、「アガ멤ノーン」の前書きに同様な言及がある事を看過するわけにはいかない。すなわちその著者は「(カッサンドラーの予言と死は)驚愕と十分な憐憫を持っているために嘆賞されている」と批評しているのである。ここに「驚愕」と訳したことは、*ekplesso* 「度肝を抜く、びっくり仰天させる」という意味の動詞の名詞形であり、用例はあまり多くはないが、アイスキュロスは一度だけ「そのような禍いの驚きが私の心を恐れさせます(Pers.606)」とアトッサに言わせている。「前書き」においてもこれはカッサンドラーの予言と非業の死に関して述べられているわけであり、我々と同じ人間がその人にふさわしくない不幸に陥ることが恐れ *phobos* と憐れみ *eleos* の感情を与えるとアリストテレスがいうのと軌を一にしている。すなわちこういう類いの不幸は観る者を仰天させ恐れさせるのだと解釈できる。

また「前書き」で「憐憫」と訳した *oiktos* ということばは「憐れみ、同情、嘆き」を意味し、それはアストテレスのいう *eleos* とほぼ同じ内容を持つことに疑いはないであろう。つまりその不幸にふさわしくない人の陥る非運が同情と憐れみを誘うのであって、それが悲劇の要因であると考えている点で両者の悲劇観に大差は無い。

ここまで見て来ると、「前書き」の著者が非常に凝縮した形で、常識的であるかも知れないが本質的な解釈を従来の *hypothesis* の定型につけ加えて述べているのだということがわかる。否、むしろこれが本来の *hypothesis* のあり方であったかも知れないのである。そこで「前書き」の批評の部分は形式的には従来のものから外れていて、中世の学者の附加したものかもしれないが、内容的には正鵠を射たものであって、もしかすると古代からの批評を受け継いでいることもあり得る、という前提に立って『アガ멤ノーン』の解釈に臨むことにしよう。またたとえこの批評が全く中世の学者のものであったとしても、上に見たような背景を持つことばである以上は、それが作品の内容に即して適切なものであるなら、その価値をいささかも減ずるものではないだろう。

## 本文

本文の序。

アイスキュロスの『アガ멤ノーン』の「前書き」に「劇のこの部分は驚愕と十分な憐憫を持っているために嘆賞されているとある「この部分」とは、トロイアの王女であり誰にもその言葉を信じてもらえない予言者カッサンドラーが、凱旋した王アガ멤ノーンに伴われて王宮に入る前に、クリュタイメーストラーによる夫殺し、オレステースによる母殺し、そして自分の非運を予言して死に赴く場面であり、ここには『オレスティア』劇の重要な要素が集約して、まさにその悲劇的な展開を待つばかりになった張りつめた緊張の高まりがある。その場面に関して、「前書き」の著者は驚愕と憐憫ということばを用い、それが充分にあるからこの作品が優れていると評しているわけである。

ところでこの「前書き」の論旨に従えば、まず妻による夫殺しと息子による母殺しというアトレウス家の二つの犯罪に関して驚愕ということばが用いられ、憐憫ということばは第一にはカッサンドラーの死に関して用いられていると理解するのが自然である。この三部作の主題は「報復の正義」であり<sup>(8)</sup>、アガ멤ノーンもクリュタイメーストラーもそれぞれ殺されるべき理由があるのに反して、カッサンドラーは罪なくしてそれに巻き添えになるからである。

また序文の中で「こういう類いの不幸は観る者を仰天させ恐れさせる」と書いておいたが、悲劇の展開に驚愕するのとその結果恐れるのとは厳密に言えば同一でない。またこの作品には冒頭から悲劇の進行を予想させる「恐れ」の感情が支配していて<sup>(9)</sup>、このことばを追っていくだけでも一編の論文になるのでそれは別の機会に譲り、ここではカッサンドラーの罪なき死とそれが惹き起こす憐憫の感情を『アガ멤ノーン』の重要な劇的成功の要因と考えると、その場面にいたる劇の展開を「憐れみ」ということばを中心に追っていくと思う。

## 憐憫について

「前書き」において「憐憫」と訳したのは *oiktos* ということばである。これは「憐れみ、同情、嘆き」という意味を持ち、アリストテレースの *eleos* にほぼ対応し、古典における用例もほぼ同じ比重を持つにも関わらず、アイスキュロスの作品においては前者が七例あるのに対して後者は一例も無い。その派生語に至っては、前者が *oiktros*(6)、*oiktizo*(6)、*oiktiro*(7)、*oiktismos*(1)、*philoiktos*(2) の用例に対して、*eleos* は一例のみである<sup>(10)</sup>。「前

書き」の著者が *oiktos* ということばを選んだ理由は意図的にアリストテレースの用語を避けたのではなく、アイスキュロス自身がこのことばを重用したからだと言えよう。

『アガ멤ノーン』においては、これらの派生語も含めて六例ある。一つはカルカスの予言の中の兎を喰う鷲の凶兆に関して、次はイーピゲネイアの犠牲に関して、残りの四例はカッサンドラーの運命に関して彼女自身とコロスが二回ずつ述べている場面で用いられているのである。この事実は興味深い問題を示している。『アガ멤ノーン』は「オレスティア」三部作という構成の中で扱われるから、クリュタイメストラによる夫殺しが主題であり、その殺人は娘イーピゲネイアの犠牲に対する報復行為であって、カルカスの予言もそれに関連しているというように理解され易いが、『アガ멤ノーン』解釈において軽く扱われがちなカッサンドラーこそ、この第一部の本当の主人公なのではないかと、この事実を見ていて思うのである。

カッサンドラーの殺害場面は舞台上演せられこそしないが、その惨めな死の様は劇の中心部で不自然なほどに繰り返して、コロスとの問答の中で強調されているし、彼女が劇の表に現われて来る場面も 1035-1330 行と、この劇の中心の長大な部分を占めている。定まった神話伝説を素材にして、それに独自の解釈と潤色を施して創作の技を競うのが詩人の腕の奮い所であるならば、この本来の筋の上では脇役に過ぎぬカッサンドラーに照明を当てて、罪なき者の死という悲劇をもう一つの主題とすることにこの詩人の狙いがあるのではないかと思う。その点を *oiktos* ということばの用法が示しているのもであると言えるだろう。以下でこのことばを主題にする三つのコロスの歌の場面を取り上げてみる。

#### (一)

プロローグでは王宮の屋根に現われた番人がトロイアからの烽火の合図の由来とそれを毎晩寝ずに見張る自分の辛い任務を嘆き、また王宮の中で進行している陰謀を暗示しながら将来への恐れと気遣いを述べる。そこへトロイア陥落の報告を聞いたアルゴスの長老たちから成るコロスが王妃のもとへ慶賀を述べに登場する。彼らはパロドスにおいてトロイア遠征のいきさつとその行動の正当性を強調し、壮挙に取り残された我が身の不甲斐なさを嘆きながら、町の中の祭壇に明々と燃えさかる犠牲の火のいわれを問う。

続く第一スタシモンにおいて長老たちは、ギリシア軍出発の際のカルカスの鳥占いの変事を思い出させる。トロイア遠征のためにギリシアの若者を率いて立とうとする二人の王の前に、黒と尾の白い二羽の鳥の王(鷲)が館の近くに現われて、仔をみごもった兎を喰っ

ていた。従軍の予言者カルカスは、この二羽の鷲は戦いを好む二人の王を意味すると解し次のように占って言った。

「時至り、この軍は  
プリアモスの都を 攻め取るだろう。  
城壁の その前に  
民が豊かに蓄えた 家畜もすべて  
カづくで モイラ(運命)が 奪うだろう。  
ただ希うのは 神の嫉みを受けて  
トロイアに集った 大いなる轡(ギリシア軍)が  
まず先に打ちのめされて 闇に包み込まれぬことだ。  
それは、聖いアルテミスが  
憐れみの心から 父神の  
翼ある犬を 憎むからだ、  
哀れなる兎を 産み月も待たずに  
仔もろ共 屠り去ったのを、  
まことに 鷲の宴を 忌み嫌うのだ」(126-138)。

ここに「憐れみの心」と訳したのが *oiktos* である。この予言は直接には、その次に述べられるイーピゲネイアの犠牲を意味していると考えうるが、女も子供も共に攻め滅ぼされるトロイアの滅亡、敵味方の別なく徒らに戦場に朽ちる兵士、とりわけ浮気なヘレネーのために異国で滅びるギリシアの若者、そしてその戦利品の一つとして敵国に連れて来られるが早いかすぐに生命を落とす王女カッサンドラーなど、戦争にまつわる凡ゆる残虐行為の犠牲者に対する憐れみ全てを含んでいると解することもできる。

この戦争は主客の間の掟を守るゼウス・クセニオスに対する罪を犯した、トロイアの王子パリスを罰することを大義名分にしたものであった。しかしトロイア側に味方し、幼き者の生命を慈しむ野の獣らの女神アルテミスは、遠征軍の指導者にも相応の犠牲を要求した。アウリスに集結したギリシア軍は逆風のために船出ができず、女神の怒りを解くためにはアガ멤ノーンの娘イーピゲネイアを犠牲に捧げなければならぬと予言者は占う。そしてこの犠牲が王に対するクリュタイメーストラの恨みを招き、父の遺恨を晴らそうとするアイギストスと結んで陰謀を企む原因となる。

「我は呼ばわる 医師なるパイアーンを  
逆しまに吹く風に 船留めが  
長引き ダナオス人らの  
船出を止めることが 無いようにと、  
それは更に 掟に背き 食べることも叶わぬ  
生贄を迫り、 一族の夫を軽んずる  
諍いを作り出す。  
怖ろしい家守りは 去りもやらずに  
また立ち返っては 謀りごとを企み、  
子の仇を討つ 瞋りを忘れない」(146-159)。

(二)

「ゼウス讃歌」<sup>(11)</sup>をはさんで、コロスはイーピゲネイアの犠牲の一部始終を物語る。ギリシア軍の総帥アガメムノーンは、アルテミスの怒りを持出して娘の犠牲を迫るカルカスのことばに、大地を杖で打って嘆いたが、長い船留めのために疲弊する兵士と痛む船を前にして、私情のために公の責任を逃れることはできないと決断を下す。

年上の君は 声を上げてこう言った。  
「それに背けば 運命は厳しい、  
しかし 我が家の誇りである  
娘を殺すのも また辛いことだ、  
乙女を屠った血の河に 父親の手を浸し  
祭壇に寄ることと このいずれが潔いことだろうか。  
だがまた 如何にして 船を棄て  
味方の信に背くことが出来ようか。  
風を止めるための 犠牲となる  
乙女の血を ひたすらに  
猛り求めることこそ 掟に適うのだろう。  
良かれと願うことしか 私にはできないのだから」(205-216)。

全軍の指揮者としての責任を父親の愛情に優先させたアガメムノーンは、非情なまでに心を頑なにし、こうなった上は何でもやってのけようという不敬な考えに心を変え、進んで娘を犠牲に捧げる役目までも引き受ける。そして必死に懇願する娘に猿轡をかけることまでして祭壇に載せる。

「懇願も、『お父様!』との訴えも

娘盛りの生命さえ 戦を好む裁き手は

顧みることを 敢えてしなかった。

祈りの後に 父王が供の者らに命じたのは、

牝山羊のように 長衣に包み

伏し倒れるのを

心をこめて 高く揚げ

見目も麗しい その口もとを

心を配りて 抑えよということだった、

家を呪う 言葉が漏れることを忌み

轡をたのみにして 声を緘ざしたのだ。

乙女が 鬱金の衣を捨て

犠牲の役の それぞれの者に

憐れみ誘う 眼の矢を

必死になって 放つ様は、

さながらに絵に描くようだった、

懇願しようとして 焦がれるその姿は。

それは幾度だったろうか 父王の 豪勢な宴席で 歌ったことは、

清ら処女の 声も高らかに

愛しい父が 浄め酒を 三度灌いだその後に、

栄えを祝う讃歌を 節も愛らしく捧げたのに」(228-247)。

ここに「憐れみ誘う」と訳したのをが *philoiktos* である。愛する娘をやむを得ず手につか

ねばならないアガメムノーンが、のっぴきならぬ立場に立たされて、不敬なまでに冷酷な気持ちに心を変え祭壇に臨む様子と、イーピゲネイアが最期の希望をこめてただ眼差しの力のみならず嘆願する様とは哀れにも美しい対比を見せる。そしてコロスは「その後のことは見もしなかったし、言いもすまい。カルカスの技は実現せずにはいないのだ」とそれに続く無残な場面は敢えて語ろうとしない。この事件を契機に冷酷な気持ちに心を固めた王が、トロイアで一層残虐な行為に駆り立てられたであろうことは容易に想像されるし、伝令や王自身のことばもそれを暗示する<sup>(12)</sup>。これらも含めてコロスは「苦難により学ぶ」とディケーが定めていると歌うのである。

(三)

トロイアから帰還したアガメムノーンにつき従っていたカッサンドラーは<sup>(13)</sup>、王と王妃が舞台に出ている間は無言であったが、二人が王宮に入ると予言の力に憑かれて、コロスとの間に七組の詩行で歌を繰り返す、その中でアトレウス家の一族の呪いを語り、また王宮の中で王の身の上に起ころうとする惨劇を予言する。そして彼女はその六番目の問答歌(amoihaion)の中で自分を待ち受ける非運についても語る。

カサ「おお、おお、惨めな私の 不幸な運命よ、

己の痛みも 注ぎ添えて 嘆きの声を  
挙げるとは、何れの方へ 行けと言って  
憐れなこの身を このように導くのか。  
共に死ぬという 定めなのか」。

コロス「神に憑かれて ものに狂い、

己の身を 嘆いては  
調べを外れた その調べ、  
薄柿色の鳥のように  
飽かずに叫び 憐れにも  
イテュス イテュスと 泣き騒ぐ、  
悲しみ暮らす 驚なのか」。

「おお、おお、声も鋭い鶯に 廻り合わせた  
その定め、羽根の衣を打ち掛けて  
嘆き知らずの 美き日々を  
御神は 鳥に与えたのに、  
吾を待つのは 両つ刃の  
身を裂き通す 利き剣」。

コロス「何処から来る 神懸かりか  
空しい痛みが 襲い来て、  
口にするさえも 恐ろしい  
叫びを 高い節に乗せ  
声高らかに 唱い上げる。  
言うも揮かる 禍言の  
予言の道の 涯知れず」(1136-1155)。

この「憐れにも」と訳した所に *philoiiktos* が使われており、直訳すれば「憐れなる心もて」となる<sup>(14)</sup>。カッサンドラーのこの狂乱して恐るべき予言をする姿を見て、このようにコロスは憐れみながらもその予言の内容を確とは理解できずにいる。すると彼女は一層明確な表現で王の非業の死を示しながら、他人になかなか信じて貰えぬ自分の予言について次のように言う。「そしてもしこれらの中の何事か、私が説きつけられぬ事があったとて同じこと。何の変りがあるでしょう。来るべきことは来るでしょう。あなたはそれに居合わせて、あまりにも真実の予言者と私を憐れみ言うでしょう」。生前には決して人に自分のことばを信じて貰えなかった彼女が、死んでその後にやっと偽りの予言者(1195)ではなく、真実の予言者として認められるだろうと、運命の皮肉に我が身を憐れむ(*oiktos*)のである。この後でカッサンドラーは、自分にとって苦しみと屈辱の徴しでしかなかった、予言者の身分を表わす杖と飾りをかなぐり棄てて、滅びの運命を甘受するために王宮に入っていく。彼女の唯一の慰めは自分たちにこのような死を謀む者にも、同じような運命が待ち受けていると予見していることである。その彼女の最後のことばと彼女を憐れむコロスのことばの中に *oiktiro* という語が二度用いられる。



カサ「でも私は行きます、館の中で私とアガムノーンの運命を嘆き悲しむために。生きるのはもう充分。ああ皆さん、私は決して、鳥が藪を恐がるように、わけも無く恐れて呻き嘆くではありません。死んだ私のためにこのことを証言して下さいね、女の私のために一人の女が死に、悪い妻を持った男のために一人の男が倒れた時には。これから死のうという時にこの御親切をお願い申します」。

コロス「おお、惨めな人よ、定められた死のゆえに汝を憐れむ」。

カサ「もう一度だけ申しますが、それは自分の挽歌ではありません。私はただ太陽に、その最後の光に向って祈ります。仇討ちしてくれる人々が、私を殺したことについても敵に仕返しするようにと、女奴隷を殺すのは、易しい仕事でしょうけれど。

ああ、人の世は辛いもの、幸せな人でさえ、陰がそれを変えるもの。それが不幸な人ならば濡れたスポンジのひと擦りで、その絵姿は消えてしまう。そしてこちらの方を、幸せだった人たちの不幸より、ずっと私は憐れに思うのです」(1213-1330)。

#### まとめ

『アガムノーン』の「前書き」に作品の批評を書き加えた者が、たとえ古代アレクサンドリアの文献学者であろうと中世ビザンツ帝国の文法学者であろうと、その著者の感性は寸言にしてこの劇の性格の要点を簡明に表現しているという予想の下に、「憐れみ」という意味のことばを中心にそれが使用されている場面を拾い上げてみた。そしてそれらが、1. 兎を喰う鷲についてのカルカスの予言、2. イーピゲネイアの犠牲、3. 自分の死を予言するカッサンドラーという三つの重要な場面においてその状況に決定的な重味を加えることばとして用いられていることが明らかになったと思う。

この三つの場面に共通するのは、トロイア戦争の原因には何の関わりもないのに、戦争を遂行しようという非情な意志の前に為す術もなく滅びていく罪なき者の死である。その意味で、ストーリーの展開の中でいささか唐突で不自然な鷲の食事のエピソードも、次の二人の女性の非業の死、その他多くの無辜の民の死の象徴と考えれば納得が行く。そしてこの二人の女性の死のエピソードの間には、ヘレネーという一人の女のために多数の生命を奪った戦争と、その指導者たちに対する呪詛とも言うべき長大なコロスの歌(367-474,681-781)が続き、その厭戦気分と王たちに対する反感が高まったところにアガムノーンが、カッサンドラーを伴って登場するのである。それは凱旋將軍を迎えるという祝典の気分にはほど遠く、王妃の陰謀が無くても王の没落が予想されるほどの陰鬱な気配

が支配している。

そしてこれらの戦争に伴うあらゆる残虐非道の行為の最高責任者たる王の破滅が「正義の讃歌」(750-781)において暗示され、高価な敷物を踏むという象徴的行為によって準備されて、王はその定められかつ仕掛けられた罠の中に自ら入っていく<sup>(15)</sup>。だからトロイア戦争を指揮したことによって王の死は二重に必然性のあるものとして劇の構成の上で準備されているのである。一つには無辜の民を多数滅ぼしたことに対する神と人との怒りを受けて、もう一つは娘を殺された王妃の恨みを受けて。しかし、その両者は共に一つの行動の免れ得ぬ結果なのである。

ところでこの二重の必然性をもたらす構造は、この物語の上では二つの時間の方向と対応している。一つは通時的な流れで神話・伝説に語られたアトレウス家の呪いであり、他は十年ほどの幅はあるものの、トロイア戦争をめぐる共時的な視野である。前者はアトレウス、テュエステースの第一世代、アガ멤ノン、クリュタイメストラ、アイギストスの第二世代、オレステースとエレクトラーの第三世代にわたる一族の悲劇、後者はトロイア戦争にまき込まれたイーピゲネイアとカッサンドラーの悲劇である。この中イーピゲネイアはこの双方に関わりを持つ点でこの二つの方向の交点に立つといえるのだが、実際はこの劇では彼女の犠牲のエピソードは、コロスの記憶の中で語られるのであり、舞台に登場してその無残な死を演ずることによって、二つの時間の方向軸の交わる場所、伝説と同時代の事件とのせめぎ合う場に置かれた人間の悲劇的な破滅の様を表わすのは、ここではカッサンドラーなのである。イーピゲネイアは戦争の開始に先立って人身御供とされ、カッサンドラーはその終結後に亡国の奴隷の身となって殺され、共にその死によって戦争の非道さを体現するという点では、両者は双子の姉妹とも形容できるほどである。そしてアイスキュロスはその彼女を劇の中心部分に置いて王と自分の死を予言させ<sup>(16)</sup>、また王の最期をも見届けさせたのである。

ところでカッサンドラーの死についてはホメーロスでは次のように記されている。キルケーに教えられたように、オデュッセウスが死者を呼び出す儀式を執り行くと、多くの死者に混じってアガ멤ノンが現われ、自分とカッサンドラーの「憐れな死」について語る。

「船の中のこの我を　ポセイドーンは打たなかった、  
凄まじく荒れ狂う　風の息吹きを捲き起こして、

我に敵対する者共も 陸の上で害することはなかった、  
しかしここにアイギストスが 我に与えたのは死と滅びだ  
禍いな妻と共に謀りを巡らし、家の中へと招き入れ  
饜応すると見せかけてその実は、餌を喰む牛を殺すように。  
いとも憐れな死に場であった」。

(Od. XI 406-412)

「いとも憐れに聞こえるのは プリアモス王の娘の  
カッサンドラーの声だった、  
好智のクリュタイムネーストラーが  
我が傍らで殺したのだ、我は手を挙げ地に向けて  
それを叩きつけた、剣で刺され 死にゆく身ではあったが、  
犬の面をした恥知らずは 臨終の我に背を向けた、  
手を差し伸べて目蓋を閉じ 口を鎖ざしてやる情けすらも無く」。

(Od. XI 421-426)

ここに「いとも憐れな」とあるのは oiktistos、「いとも憐れに」としたのは oiktrotate であって、いずれも oiktros の最上級の形である。そしてここでも興味ある事実が観察される。即ち、アガ멤ノーンとカッサンドラーの死という、ホメーロスの中のごく限られた場面に、「憐れ」それも oiktros という形容詞が二種類の最上級に形を変えて用いられているということである。彼らの死に「憐れみ」oiktos という表現が伴うのは、固定したイメージの働きなのであろう。そうであれば「前書き」の批評はこの場景を要約して表現する時の最も自然な用語なのであって、また我々が作品を解釈する場合の最も重要な手掛りとなるキーワードなのである。そしてそれに従ってことばを追っていった時に、劇の中で「罪なき者の死」を表わす重要な場面で、このキーワードを見出したことは本文の中で見て来た通りである。

さてアイスキュロスが『オレスティア』劇の素材として用いた物語りの筋は、ホメーロスに現われる断片や、アポロドーロスが記す概要とほぼ同じであったらしい。その素材を用いてそれに詩人が想像力と技巧を加え、現在の壮大な「オレスティア」三部作を作り上げたのである。このアトレウス家の三代かかって織りなす織物の縦糸には、アトレウスの呪いという反復して行われる報復行為が一貫して用いられるが、それぞれの劇には異った色合いの横糸が彩り豊かに用いられる。そして『アガ멤ノーン』の場合には、トロイア

戦争という圧倒的な暴力の前に滅びていく生命の儚さを横糸に用い、それを「憐れみ」という色で染め上げるのである。この横糸の中心部分はカッサンドラーの死であるが、もちろんそれはアトレウス家の直系であるアガメムノーンの死と絡み合い、またイーピゲネイアの犠牲とも纏れ合っている。アイスキュロスは先に引用したホメーロスの素材を膨らませるために、王宮の前でカッサンドラーに王と自分の死について長々と予言させ、そしてその二人の死を劇の中心部とするための構成上の技巧を凝らしたのである。この意味で『アガメムノーン』の主人公は三部作の観点からは王とりわけ王妃であろうが、第一部だけに限ってみればそれはカッサンドラーであろう。それ故、この第一都の「前書き」の概要を王とカッサンドラーの死に絞り、その評言を「驚愕」と「憐憫」という言葉で実に簡潔に言い表わし得た評者の慧眼と見識はまことに優れたものと言わねばならない。

以上の考察を経た上で「前書き」の評言は、文体は別として『アガメムノーン』の批評に限っていえば、決して無価値ではないし、Aristophanes 以前の伝統に則っているものと言えよう<sup>(17)</sup>。

註

- (1) O. C. D. q.v.; Pfeiffer, P.; *History of Classical Scholarship*, 182ff.
- (2) Zuntz, G.; *The Political Plays of Euripides*, pp.129-139  
Taplin, O.; *The Stagercraft of Aeschylus*, pp.304-306  
Fraenkel, E.; *Aeschylus Agamemnon*, p.370.
- (3) Zuntz, G.; op.cit., p.131.
- (4) O. C. D., q. v.; P-W., q.v.;  
Mette, H.J.; *Urkunden Dramatischer Aufführungen in Griechenland*, p.203.
- (5) Zuntz, op.cit., p.131.
- (6) O. C. D., q.v.
- (7) Lucas, P.W.; *Aristotle Poetics*, pp. 19-20.,
- (8) 池田、「アイスキュロスの *Oresteia* における dike について」 p.27  
川島、『ギリシア悲劇の人間理解』 p.25, al.
- (9) 川島、「終わりへの期待と不安」ということばでここでは表されている。
- (10) *Italie, Index Aeschyleus*, q.v.
- (11) これらのことばと内容について、ここでは論じない。
- (12) 525-8, 537, 813-6, 824.
- (13) この場面に関して「前書き」が車の台数について与える説明が、その信憑性を疑われる原因となっている。註2 参照。
- (14) Ag.1143, (Tr., Neapolitanus II F. 31) の読みに従う。
- (15) Goheen, R.F.; *Aspect of Dramatic Symbolism*, p.115.
- (16) Mason, P.G.; *Kassandra, JHS.*, Lxxx, 1959, p.86. 彼はこの予言の部分がアイスキュロスの創作だとする。
- (17) Pfeiffer, P.; op.cit., p. 195. この種の類型を *Diegesis* と分類できるという。